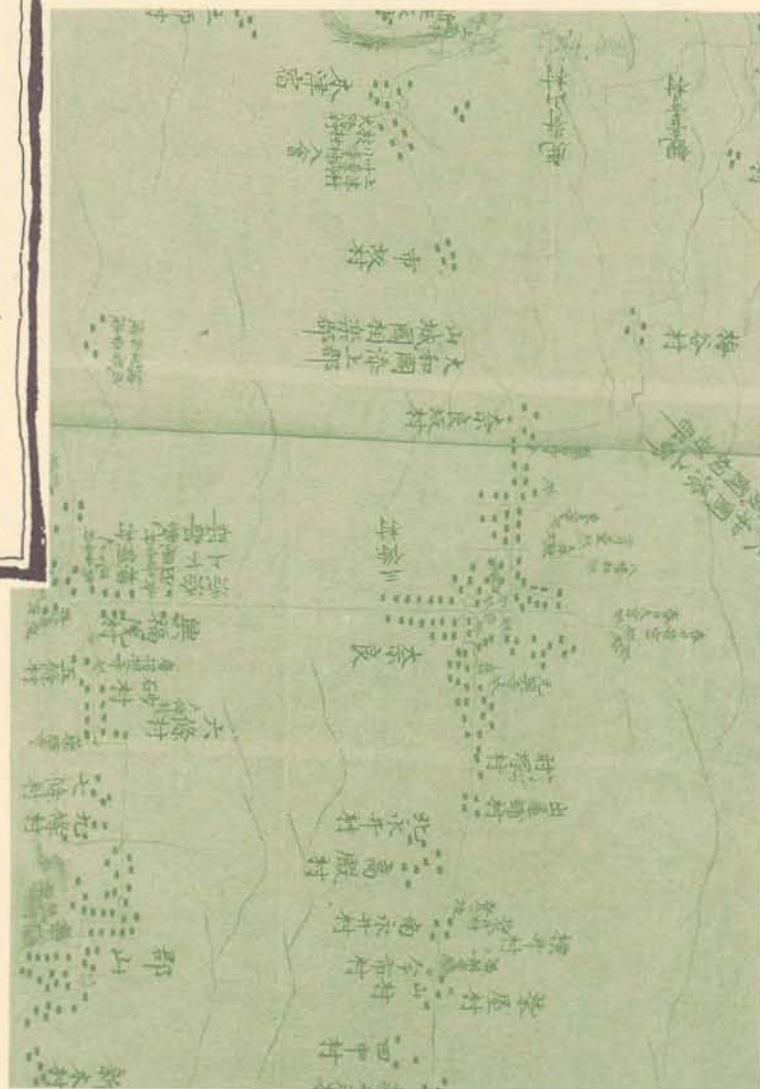


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究



二〇〇三年 第三二号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵 伊能大図一三四号の部分「奈良」付近

第六次測量で測られた奈良市の付近である。伊能隊は大坂から生駒越えをして奈良平野に入り、当麻寺まで南下したのち、反転して郡山、西大寺を経て奈良の町に入った。入り口で測量を中止し、奈良奉行に届けたあとで町内の測量をおこなった。奈良は幕府領で江戸から派遣された旗本の奈良奉行が支配していた。

春日大社、大仏殿への測線が見えるが、一の鳥居あるいは山門まで測って測量をおわった。翌日は観光のため測量を休む。袴をつけて、まず春日大社に参拝、宝物の鑑兜などを参観、東大寺の八幡宮、二月堂、三月堂、大仏殿に参詣したあと、東大寺勧進所竜松院で宝物を拝観する。ついで東金堂、南円堂、北円堂などを廻った。このときの拝観記を忠敬は『大和霊宝記一巻』にまとめている。

春日大社、東大寺、大仏殿など屋根しか描かれておらず、郡山城の描写と較べると大変簡単である。文化六年に作られた奈良の大図が伊能忠敬記念館に伝えられているが、風景は遥かに華麗である。最終本の原因はもともと細緻だったと思われる。この部分を写した画工は社寺には関心がなくて、かなり簡略化された感じである。他の大図と同様民家の屋根は描かれず、四角な印が連続している。

アメリカ大図展のための複製図では、本図には伊能洋氏らの手により、山景、水路に着色する予定であり、ぜひ御覧頂きたいと思っている。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

目次 32号

伊能忠誨(ただのり)日記の連載について

伊能忠誨日記(二)

トビックス

「子午線の夢」三条市で上映会

学習院大学の伊能図がネット公開

初詣と伊能忠敬

伊能図書館に「史跡めぐり」を開設

芳名録より

署名解説のお願い

研究ノート

『伊能家文書紹介23』

高橋景保「御用日記」より

東大総合図書館蔵伊能忠敬測地原図

伊能図における経線のズレについて(二)

地域史料紹介

篠山領追入本陣の事前準備

岩城島の伊能測量文書(二)

忠敬談話室だより・伊能測量の歌

日々の話題・お便りから

お知らせ・伊能忠敬記念館・収蔵品展開催

総会・例会の開催

大阪旅行会の案内

特報・アメリカ大図の着色作業開始

(入会案内・編集後記)

佐久間達夫 一  
佐久間達夫 四

垣見 壮一 八

齋藤 仁 一二

待野 貞雄 一六

前田 幸子 二二

伊能 陽子 一八

二〇

安藤由紀子 二五

渡辺 一郎 三〇

吉田 正人 三四

横川淳一郎 四四

伊藤 栄子 五一

渡辺・渡部 六〇

編集部 六二

六六

六七

六八

編集部 六八

いのうただのりにつき  
伊能忠誨日記の連載について

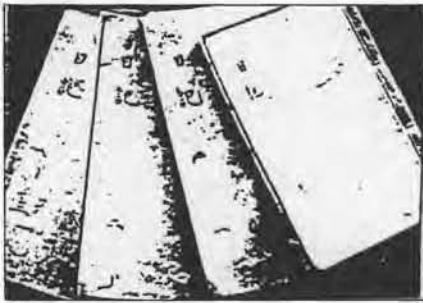
佐久間 達夫

伊能忠誨は、忠敬の孫にあたり、忠敬が全国測量中の文化三年（一八〇六）に、景敬（かげたか）とリテとの間に生まれ、忠敬がもつとも将来を楽しみにし、手ばなしの愛情をそそいだ人である。

忠誨は、江戸にて、伯母の妙薫（みょうくん）（忠敬の長女・稲）に育てられ、祖父忠敬の跡をついで天文測量の道に進もうと、高橋景保（かげやす）に励んだが、文政十年（一八二七）二月二日に、二三歳の若さで没した。

この日記は、忠誨が一五歳の文政三年三月より、同九年九月までについて記したもので、忠誨の江戸、佐原での生活の様子や、長女・貞の出生・死去、忠誨の命名の経緯、忠敬の肖像画の表具の依頼、伯母妙薫の死、大日本沿海輿地全図の幕府上皇の様子等が記されていて、忠敬の生涯を知るためにも貴重な史料である。本号より連載をはじめさせていただくことにする。

原文は漢字と片仮名で記述されているが、本文では、片仮名をひらがなで表記し、天気のみ記述日などは省略した。



六日	晴天	あけはれ
七日	曇天	くもり
八日	晴天	あけはれ
九日	晴天	あけはれ
十日	晴天	あけはれ
十一日	晴天	あけはれ
十二日	晴天	あけはれ
十三日	曇天	くもり
十四日	曇天	くもり

伊能忠誨日記  
佐原市・伊能忠敬記念館蔵

送 伊能君之東都序

(佐原市所藏・伊能忠敬記念館保管)

送

伊能君之東都序

伊能君將之于東都。予言之曰。乃祖。向  
在于鄉里。捨耕家事。克謹克儉。弘產積  
材。或有飢荒之艱。則賑施而救疾苦。隣  
里鄉黨。有來歸者。則與之錢穀。而賑其  
生。其生。產日厚。家事歲優。又性好學。雖  
艱辛之際。終得閑。則玩經籍。樂詞藻。孜  
孜不怠。日積其精。既及知命年。屬家產  
于乃父。去遊于東都。兄高橋東岡先生。  
伊能君之術。偶遇。

國家撫綏夷俗之時。以測量輿地之事。而  
行選抽稟命。赴于夷域。作地圖而上之。  
自是累年。有命。巡行郡國。歷涉遠近。攀  
嶮峻。涉洪濤。雖屢遇危艱。是勉而不怠。  
謹命服事。殆二十年。竟成其功。是非氣  
滿志得。而執養其老者。則不能矣。實可  
不謂大業也哉。畢事而歸。遭斯虐疾。遂  
不起。然地圖之功。未全成。以故不敢發  
表。屬吏弟子。就業如左。日能成其功。而  
上之。實文政四年七月矣。即告  
官發表請免。

○久保木清常が忠誨の江戸へ出発に際して贈ったことば

送

伊能君之東都序

伊能君將之于東都。予言之。曰。乃祖。向在于鄉里。  
按排家事。克謹克儉。弘產積材。或有飢荒之艱。則能  
施而救疾苦。隣里鄉黨。有凍餒者。則與之錢穀。而賑  
其生矣。生產日厚。家事歲優。又性好學。雖艱辛之際。  
纔得閑。則玩經籍。樂詞藻。孜孜不怠。日積其精。既  
及知命年。屬家產于乃父。去遊于東都。見高橋東岡先  
生。學象緯之術。偶遇國家撫循夷俗之時。以測量輿地之  
事。而所選抽稟命。赴于夷域。作地圖而上之。自是累  
年。有命。巡行郡國。歷涉近遠。攀嶮峻。涉洪濤。雖  
屢遇危艱。是勉而不怠。謹命服事。殆二十年。竟成其  
功。是非氣滿志得。而能養其老者。則不能矣。實可不謂  
大業也哉。畢事而歸。遭斯虐疾。遂不起。然地圖之功。  
未全成。以故不敢發表。屬吏弟子。就業如左。日能成  
其功。而上之。實文政四年七月矣。即告官發表請免。





国家、大其功、惜其死、使吾子、永世称姓、佩刀、且  
 賜以市井之酈子之榮、可仰可美焉、於是遠近郷党、三  
 族故旧、聞之者無不歎欣者、雖殊族者、稍々聞之、又  
 皆慶賀欣賞焉、雖然、是皆乃祖勤儉之德所以使然也、  
 子克勤哉、今再赴于東都、將就學、夫東都者、天府之  
 地、經術詞藻不乏其人、天文曆算、素有其師、吾子克  
 懋而不懈、戒勿陷市井之俗勿慣靡麗之態、唯法父祖之  
 所行、慎修儉德、以期其成、詩曰、無念爾祖、聿脩厥  
 德、吾子居其嗣、雖不幸闕過庭之訓、乃祖之監、在羹  
 瀹、謹戴国家之寵恩、繼父祖之業、能成其行、無隨鄉  
 里之譽、則三族是歎、朋友故旧相共慶、光榮無涯、及  
 吾子之去也、聊述乃祖之行与国家之寵恩、以為之言、  
 子其往、勤戒哉

文政四年孟冬念一日

窪木俊 敬白 ㊦

注・窪木俊は、窪木俊蔵のこと。久保木清淵の長男。

・久保木は日本名ですが、江戸時代の漢学者は、名字を二字か  
 一字にしたそうです。それにならって『久保木』を『窪木』  
 と表記したようです。(久保木家の現当主の話)

# 伊能忠誨日記(一)

佐久間 達夫

文政三庚辰歲 伊能忠誨一五才

三月 小

- 朔日 丁巳。朝雨天、四半時後風、寒し。
- 二日 薄曇。紙屋新五郎、持田兄弟同道来る。算(術)稽古。申時後雨。持田勝三郎、是より毎日来る。持田勝助は二、三日来り。髪屋東則今日稽古初め也。
- 四日 朝雨天、四半時後晴天。九半時後曇天、七ツ時より晴天、風寒し。伯母(注1) 浅草へ行く。
- 五日 晴天、昼前寒し。伯母向嶋へ行く。保木敬藏(注15) 須藤甚右衛門(注24) へ行く。六時廻状来る、石渡鐘太郎方より至来。(廻状文略)
- 六日 薄曇。予、信田権右衛門と相見に行く。保木又須藤へ行く。予疵癒(しゆ)。
- 七日 土用事已一刻、晴天。保木、大沢権右衛門へ行く。伯母、紙屋庄藏へ行く足立重太郎(注21) 来る。三宅八郎左衛門来る。
- 八日 甲子。上弦申六刻、晴天。東士川(としかわ)の叔父豊田(注13) に来りし由故に予豊田へ行く。
- 九日 雨天。伯母紙屋新兵衛へ行く。三宅来る。
- 一二日 薄曇。予佐藤へ行く。伊八(注5) 来る。
- 一三日 小雨。伊八、大沢権右衛門へ行く。三宅来る。予と伯母、源空寺及び足立、高橋侯(注23) へ行く。
- 一四日 雨天。今夜紙屋の内義来る。伊八来る。
- 一五日 曇天。下女はつ宿より来る。長居す。
- 一六日 望西(とり) 九刻、晴天。伯母紙屋新兵衛へ行く。予、川口勝次郎(注16) と芝居へ行く。八ツ時後曇天。

- 一七日 薄曇。伯母桑原(注4) へ行く。足立重太郎来る。下総国中村の左内来る。大野弥三郎(注22) 来る。
- 一八日 雨天。足立長薦(ちようせん)の弟子玄修来る。市野金助(注17) 来る。
- 二〇日 薄曇。紙屋の内義来る。柏木乙右衛門(注3) 来る。大川治兵衛(注10) 来る。六時後廻状来る。
- 二一日 八十八夜、小雨。四ツ時後より薄曇八ツ時後より晴天。大野弥三郎来る。
- 二二日 晴天。安岡玄修来る。
- 二三日 下弦亥九刻、曇天。大坂町、樽屋藤兵衛の妻来る。紙屋の内義来る。九時より小雨。
- 二四日 大曇。足立長薦来る。朝五時は庚辰年、庚辰月、庚辰日、庚辰刻に当る。歳徳尊神を祭る開運吉日也と云。
- 二六日 晴天。安岡玄修来る。伯母桑原へ行く。
- 二七日 薄曇。桑原隆朝来る。天満屋長兵衛来る。保木、松浦侯へ行く。
- 二八日 晴天。半兵衛の妹、姪来る。保木、高橋侯へ行く。
- 二九日 晴天、八半時後より薄曇。桑原隆朝奥方来る。保木、松浦侯へ行く。
- 四月 大
- 朔日 丙戌、朝曇天四時頃薄曇、七時後雨天。
- 二日 朝雨天、九時後曇天。樽屋藤兵衛来る。
- 三日 朝晴天、四半時小雨。伯母相見に行く。高橋侯来る。
- 五日 晴天。桑原隆朝来る。九時前より薄曇。竜ヶ崎の松田丈右衛門(注2) の女房、娘来る。
- 六日 大曇。紙屋の内義来る。紙屋の新兵衛来る。予、紙屋へ行く。
- 七日 朝薄曇昼後曇る。八半時より雨。大坂町の樽屋藤兵衛の妻来る。持田勝三郎の母来る。三宅来る。
- 八日 薄曇。樽屋藤兵衛の妻来る。安岡玄修来る。予は薬師へ行く。

九日 上弦巳六刻薄曇、九時後より雨。下駄屋松齊来る。予、大野弥三郎へ行く。

一〇日 朝薄曇、四時後曇天。伯母齒医者又、桑原へ行く。

十一日 小満戌九刻、五時前雷鳴雨、五時後晴天、八時前薄曇。大須賀伊八来る。

一二日 晴天。予、大野弥三郎へ行く。伯母紙屋新兵衛へ行く。尾張町の兼(カネ)と娘来る。

一三日 晴天。祖父(忠敬)三年忌也。伯母、予、紙屋内義、坂部の妹、竜ヶ崎松田の女房、娘、箱田(注18)等源空寺及び浅草観音、又両国開張へ行く。七ツ時後雨雷鳴。

一四日 晴天。紙屋の内義来る。保木、松浦侯へ行く。予、大野弥三郎へ行く。

一五日 晴天、八ツ時後薄曇、七ツ時前曇天。伯母齒医者及び紙屋へ行く。又伯母と松田丈右衛門娘紙屋へ行く。

一七日 望卯(う)九刻、晴天、七時後曇る。持田勝三郎病氣平癒来る。

一八日 晴天、九時後曇天。樽屋藤兵衛の妻来る。

一九日 小雨、九時前薄曇。紙屋の内義来る。伯母紙屋へ行く。

二〇日 薄曇。伯母齒医者へ行く。伊八来る。紙屋内義と庄蔵妻来る。

二二日 薄曇。桑原隆朝の奥方来る。大野弥三郎来る。

二三日 退下弦寅四刻、雨天。松田のセヲ、屋敷へ引越し。紙屋の内義来る。樽屋藤兵衛来る。桑原隆朝来る。

二四日 曇天。予、洪川(注14)へ行く。

二五日 雨天。松平睦奥守侯初入部。三宅八郎左衛門、古橋忠左衛門、滝権次郎来る。

二六日 雨天、四時後曇天、六ツ時後晴天。半兵衛、竜ヶ崎へ行き、又、佐原へ使者に行く。松田の女房帰る。桑原隆朝入来。紙屋の内義来る。

二七日 芒種丑五刻、入梅。薄曇、四時前より晴天。伊八来り泊る。松野茂右衛門来る。伯母紙屋新兵衛へ行く。

二八日 雨天、九ツ時後薄曇、六ツ時後雨天。

二九日 上総の飯高惣兵衛(注12)の母、弟、妹来る。

三〇日 雨天、四時後薄曇、八時後大曇、七時後雨天。伊八帰る。伯母紙屋へ行く。保木、足立左内へ行く。足立重太郎来る。

薄曇、六時前より晴天。樽屋藤兵衛の妻、弟、伊八来る。紙屋の内義来る。大野弥三郎来る。リキ、小舟町へ行く。

# 五月小

朔日 丙辰、四時後薄曇。九時後地震、八時後晴天。坂部八百次(注19)帰る。去年一二月二六日より坂部家内来り泊り居す。大野弥三郎来る。

二日 大曇、四時後薄曇。坂部家内の者帰る。桑原隆朝の奥方、娘来る。

三日 薄曇、九時前より晴天。大野弥三郎来る。

四日 薄曇、四時後晴天、六時後風。足立重太郎来る。

五日 薄曇。予と伯母高橋侯へ行く。信田平吉来る。永沢半十郎(注7)来る。

六日 薄曇、九半時後晴天。信田平吉と権右衛門来る。永沢藤次郎(注6)永沢半右衛門(注8)の母来る。

七日 晴天、五時前より薄曇。上総屋甚左衛門来る。桑原隆朝来る。

八日 退下弦寅四刻、曇天、四時後薄曇、六時後雨天。伊八来る。

一〇日 雨天。桑原隆朝入来。

一一日 薄曇、七ツ時後曇天。大川治兵衛来る。高橋侯入来。

一二日 夏至辰一刻、雨天。樽屋藤兵衛の妻来る。

一三日 曇天、四時後薄曇。紙屋庄蔵の妻来る。紙屋新兵衛来る。大野弥三郎来る。伯母桑原へ行く。予、源空寺へ参詣に行く。樽屋藤兵衛の妻来る。

一四日 薄曇、九時後雷鳴大雨。伯母源空寺及び足立左内へ行く。上総屋甚左衛門来る。

一六日 望申五刻、雨天。予、青雲堂へ行く。桑原隆朝来る。  
 一七日 雨天、四時より曇天。子刻前地震。  
 一八日 小雨、九時後曇天。桑原隆朝の娘来る。  
 一九日 朔雨天、五時前より曇天、八時前より雨天、八半時後曇天。佐原の天満屋長兵衛来る。  
 二二日 半夏至、雨天。天満屋長兵衛、チセ来る。同人深川へ行く。  
 二四日 曇天。天満屋長兵衛、チセ来る。長兵衛帰る。  
 二五日 雨天。チセ、行徳川岸へ行く。  
 二六日 雨天。桑原隆朝娘来る。八時後曇天、六ツ後晴天。  
 二七日 小暑、午七刻雨天。上総屋夫婦来る女房は泊まる。チセ来る。  
 二八日 薄曇、八時前より小雨、八時後薄曇。上総屋甚左衛門妻帰る。  
 二九日 雨天、九時前より薄曇、八時後より曇天。渡辺啓次郎(注20)来る。

# 六月 大

二日 樽屋藤兵衛の女房来る。松田セヲ屋敷を下る。  
 三日 伯母、桑原へ行く。樽屋の女房来る。桑原の娘、子息来る。  
 六日 セヲ来る。  
 七日 桑原の奥方来る。セヲ帰る。  
 八日 桑原隆朝来る。  
 一〇日 土用事、申八刻。渡辺啓次郎来る。  
 一一日 紙屋新兵衛来る。  
 一二日 永沢太兵衛(注9)来る。  
 一三日 大暑酉四刻。予、伯母源空寺及び足立、坂部、高橋侯へ行く。又、白木屋へ行く。足立左内来る。安岡玄修来る。母(リテ)の三年忌也。  
 一四日 久保木佐右衛門(注11)来る。  
 一五日 予、保木祭祀見物に行く。久保木佐右衛門夫婦、リキ、チセ見物に行く。箱田も行く。山王(日枝神社)御祭祀也。

一六日 望夜、子五刻。チセ帰る。  
 一七日 伯母、白木屋へ行く。  
 一八日 清蔵改め渡辺犀輔来る。紙屋新兵衛来る。  
 一九日 久保木佐右衛門夫婦来る。紙屋新兵衛来る。  
 二〇日 桑原隆朝入来。伯母紙屋へ行く。  
 二三日 下弦末九刻。坂部八百次死去の由、聞く。  
 二六日 箱田左太夫、坂部へ行く。  
 二七日 予、坂部へ行く。虫干したんす白木屋へ預ける。  
 二八日 立秋、亥九刻。上総屋甚左衛門死去の由、聞く。  
 二九日 天満屋佐兵衛の女房、長兵衛来る。  
 三〇日 久保木俊蔵(注25)来る。

# 七月 小

朔日 乙卯、晴天、南大風。桑原隆朝夫婦来駕。  
 二日 松田セヲ来り居る。紙屋新兵衛妻来る。桑原隆朝奥方来る。  
 三日 永沢仁兵衛来る。  
 四日 予、結城屋へ行く。永沢仁兵衛止宿故久保木俊蔵来る。予、紙屋新兵衛より永代大橋辺涼しに行く。  
 五日 久保木俊蔵帰る。雷鳴。  
 七日 予、源空寺及び足立左内、高橋侯へ行く。

(つづく)

# 注釈

- 注1 伯母妙薫(一七六三〜一八二二)  
 忠敬の長女で、夫死後、剃髪して妙薫と名乗る。  
 注2 松田文右衛門光遠(一七八四〜一八五七) 忠敬の三女琴の夫で、常陸国竜ヶ崎(現茨城県竜ヶ崎市)の庄屋であつた。琴(一七八九〜一八六五)は、度々、江戸の忠敬や忠誨宅を訪れ、七七才で病没した。  
 注3 柏木乙右衛門 忠敬の内妻の親族。

注4 桑原隆朝如則二代如宣(二七四〇—一八一〇)の嫡子。忠敬の妻・信ときようだい。養好ともいう。

注5 大須賀八郎右衛門伊八(一七九六—一八二五)伊能家四代景善の三男八郎兵衛が、佐原村寺宿に分家した家の子。大須賀家を興し、伊能家の使用人をしていたが、三〇才で没した。

注6 永沢藤次郎恭寛(一七六五—一八三四)

義父藤次郎保高は、忠敬の郷里に近い上総国借毛村であったので、永沢治郎右衛門征俊の娘婿になり、第五次測量に参加する。恭寛は、永沢半十郎久則の第三子で、幼名を半十郎といい、藤次郎家を継ぐ。

注7 永沢半十郎久芳

祖父久則は、香取郡南中村の平山治兵衛有則の子で、永沢治郎右衛門俊順の娘婿となる。久芳は、天保九年六月一八日没。

注8 永沢半右衛門俊世

祖父俊将は、伊能三郎右衛門家五代景知の二男景寿(永沢治郎右衛門の娘ちようの婿)の三男である。俊世は俊将の子・俊清の子。

注9 永沢太兵衛 永沢治郎右衛門の一族。

注10 大川治兵衛成顯(一七八五—一八五四)

成顯は、津宮村(現佐原市津宮)の人。伊能家の帳元締をやっていた成定(一七五二—一八一〇)の娘婿で、嘉永七年に七五才で病没した。生家は、常陸国古渡村の小川弥右衛門。

注11 久保木佐右衛門

津宮村の人で、長持宰領として、六次、八次測量に参加する。

注12 飯高惣兵衛尚義 忠敬の朋友であった飯高惣兵衛尚寛(文化二年没)の孫で、幼名を吉太郎、長じて惣兵衛君露といった。尚義の父は、忠敬が仮親となった常陸国潮来村の窪谷庄兵衛の倅(せがれ)政四郎(貴兵衛)で、その妻は、尚寛の娘千枝である。

注13 豊田伊右衛門 江戸北町奉行組与力給知上総在府代官。

注14 渋川景佑

高橋至時の二男で、初め高橋善助と称した。天文方渋川富五郎正陽

の養子になり、通称を助左衛門といった。第五次測量に参加。

注15 保木永普 通称を敬蔵といい、忠敬の内弟子として、第八、九、一〇次測量に参加する。忠敬没後も地図作成に関与する。

注16 川口春興 通称を勝次郎といい、後に源次という。高橋景保の手付下役として、地図作成に関与する。

注17 市野茂喬 通称を金助といい、高橋景保の手付下役として、第五次測量に参加する。

注18 箱田真与 通称を良助、後に佐太夫と改める。忠敬の内弟子として、第七次—一〇次測量に参加する。忠敬没後も地図作成に関与する。

注19 坂部弘道 通称を八百次という。第九次測量に参加する。坂部貞兵衛の倅である。

注20 渡辺慎(尾形慶助) 通称を敬助、慶助、頭次郎、啓次郎などという。尾形姓で忠敬の内弟子となる。第二、三、四、八、一〇次測量に参加する。後、渡辺氏を継ぎ、地図作成に関与する。

注21 足立重太郎信順

足立左内信頭(一八四五年七七才没)の倅で、天文観測では江戸暦局有数の人であった。父に先だつて一八四一年に四六才で病没する。

注22 大野弥三郎規行 江戸神田松枝町に住み、忠敬、忠講の天文観測や測量器具を製作する。

注23 高橋作左衛門景保

天文方で、忠敬の全国測量や地図作成の監督をする。

注24 須藤甚右衛門 小普請組の世話係。

注25 久保木俊蔵

伊能忠敬の漢学の師、久保木清淵の長男で幼名俊蔵、諱(いみな)清常、号梅山といった。父清淵とともに「大日本沿海輿地全図」の作成に協力する。忠敬が、江戸に登るにあたって「序」を贈っている。

この「送・伊能君之東都序」は、国の重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。

注26 伊能忠敬の漢学の師、久保木清淵の長男で幼名俊蔵、諱(いみな)清常、号梅山といった。父清淵とともに「大日本沿海輿地全図」の作成に協力する。忠敬が、江戸に登るにあたって「序」を贈っている。

この「送・伊能君之東都序」は、国の重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。

注27 伊能忠敬の漢学の師、久保木清淵の長男で幼名俊蔵、諱(いみな)清常、号梅山といった。父清淵とともに「大日本沿海輿地全図」の作成に協力する。忠敬が、江戸に登るにあたって「序」を贈っている。

この「送・伊能君之東都序」は、国の重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。

注28 伊能忠敬の漢学の師、久保木清淵の長男で幼名俊蔵、諱(いみな)清常、号梅山といった。父清淵とともに「大日本沿海輿地全図」の作成に協力する。忠敬が、江戸に登るにあたって「序」を贈っている。

この「送・伊能君之東都序」は、国の重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。



映画「伊能忠敬」—子午線の夢—報告書

# 伊能忠敬

2003年2月23日(日)  
三条市中央公民館 大ホール



『子午線の夢』三条市で上映会

垣見 壮一

県内初の上映会

雪割草・福寿草の花が開き越後平野にも浅い春が来ました。

三条市での「伊能忠敬」映画上映の結果を報告します。

協力依頼があつてからの期間が短く、不本意な対応となりましたが、映画と共に展示した伊能中図と三条の当地名が入った天保一三年「越後細見図」等が好評で驚きました。

報告書と三条新聞の記事などご覧いただき、「伊能忠敬」の足跡のない地方都市での成功には、いろいろな背景があり今後同様な催しに参考になれば幸いです。

支部として展示したのは武揚堂の中図が中心でしたが、伊能図集成等は本を分解して展示しました、今後は展示用の図面があればと提案したいのですが。

新聞に取材をお願いしましたところ、好意ある記事を戴き、それが即、前売券の売り上げの伸びとなりました。

「伊能忠敬・子午線の夢」上映について

三条市中央公民館にて2月23日、映画「伊能忠敬・子午線の夢」が新潟県で初めて上映された。

伊能忠敬研究会新潟支部にも協力の依頼があり、伊能図の複製、関係図書類を土地家屋調査士会の新旧測量器械類と合わせて展示することにした。

三条市は新潟県のほぼ中央に位置する、人口約八万五千人の地方都市である。同市には残念ながら「伊能忠敬」の足跡はなく、資料も見されていない。

その街になぜ、「伊能忠敬」が登場したのか。誰がどうして呼んだのかと不思議でならなかった。実際取材を依頼した新聞社の中には、

最初は、そのような地味な記事は一般の人の興味を引くことではないし、話にならないと批判されたようだ。しかし、結果は多くの人から「感動した」「伊能忠敬は素晴らしい人だ」との言葉を戴いた。

県民性が、映画の進行と共に喜び、涙を流す人もいたという、上映が終わると拍手がわき起こり、私が居た資料展示場まで響き感動した。今後このような催しが計画されたときの参考までにお知らせしておきたい。

この催しは三条市教育委員会が計画し、特定非営利活動法人三条こども劇場が共催、おやこ劇場のスタッフが各種団体を巻き込み、単なる映画鑑賞会ではないものをと、実行委員会で種々のアイデアを出し宣伝に利用している。測量器械の模型を作る人、測量旗を手書きする人など、特に女性が地方文化の大きな担い手であることを実感しました。

前売券は大人千円、子供五百円だったが三回の上映で六百人を越す入場者を数え、成功裏に終了した。

### 『三条新聞』から

三条おやこ劇場では上映会に向け、丸井今井邸保存会の協力で忠敬が使った測量器具の原寸模型や、忠敬が測量地に押し立てて行った幕府御用を示す「御用旗」などを手づくりし、伊能忠敬の業績を研究している中蒲・小須戸町の垣見壮一さんの協力で「伊能図」の縮小版や貴重な史料を展示。ほかにも土地家屋調査士会三条支部の協力で、現在の測量器具なども展示した。

午前十時からの第一回上映には三百人が来場。上映前には土地家屋調査士会のメンバーたちが、忠敬が使った測量具を使い、現代の測量

具と比較しながらその使い方を説明してから上映した。

上映会では、映画が終了するたびに会場から拍手が上がり、見た人たちは「感動した。中年の星だ」と感激し、「上映前に測量具の説明があったから分かりやすかった」という声も多かった。

上映が終わると展示室に足を運び、「伊能図」の縮小版に見入り、新潟の海岸線で「寺泊」などの文字を探していた。

### 報告書のとがきから

□この作品と出会って何かを始めるのは年齢ではないことを知りました。多数の人たちのご協力に感謝申し上げます。(川崎光枝さん)

□ひとつづの雨が、少しずつ集めて小川になり、いくつもの小川が合流して大きな川となつて海へ向っていくようなワクワク感がありました。時々々は激流、いい流れに出会えて感謝しています。(兼古和枝さん)

### 三条新聞

2003年(平成)5年12月28日(金曜日) (8)

## 伊能忠敬—子午線の夢—

三条おやこ劇場 県内初の上映会

**『伊能図』縮小版や測量資料も展示**

伊能忠敬の測量活動は、日本列島の全土を歩き回り、正確な測量図を作成した。その功績は、現代の測量技術の基礎となった。今回の上映会では、忠敬の測量活動の歴史を、最新の映像技術で再現し、観客に伝える。また、忠敬が使った測量器具の原寸模型や、幕府御用を示す「御用旗」なども展示する。土地家屋調査士会三条支部の協力で、現代の測量器具も展示する。



堂々たる測量解説



ステージにズラリ並んだ大道具



熱気ムンムンの資料展示室



長い1日を終えて「お疲れさん！」



北極星をのぞきたくになります。



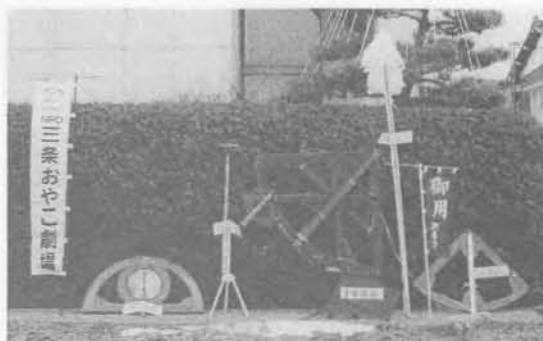
さすが伊能忠敬研究会！



手書きとは思えぬでござえ



目盛りもばっちり正確です。



大役を果たして記念撮影。よくできてます。いつでも貸し出しいたします。

□垣見壮一さんのメッセージから

三条おやこ劇場主催の「子午線の夢」は七百四十枚の前売り券が売れ、当日券も併せ九〇〇人位の入場者とのこと。地方都市の教育委員会の行事としては大成功とのことでした。

併せて展示室に手持ちの地図資料等を展示しました。武揚堂の中図を展示盤に日本列島形に張り好評でした。特に伊能中図の原寸複製の本は待つ人の列が出来、美しさに驚いていました。幾人かに購入手段の問い合わせを受けました。伊能図集成大図、伊能忠敬測量日記も知っている地名を探す人も多くいました。

参考資料として伊能隊の越後・佐渡測量の解説と、会のホームページからの宣伝文「なごやかなで気楽な会です」も書き加えた会員募集をパンフレットにして、一〇〇部作成しましたが午前中で無くなり残念でした。

土地家屋調査士会三条支部の新旧測量器具による実演、NPOスタッフによる伊能測量器具の模型の展示、さらに双六、歩幅測定には大人が夢中となる場面もあり、協力者一同感激の打ち上げでした。

このたびの催しは、年度末を控えて仕事に追われている私にとっては、余裕も準備期間もなく心残りのことも多くありました。四月半ばになれば、なんとか余裕が出来ると思いますので新しい活動を考えております。

(かきみ そういち・新潟県小須戸町)

\*編集部・熱心なご活動に感心いたしております。

三条市の山浦佐智代さんが伊能研究会に入会されました。

## 映画以外にも盛りだくさんで

NPO三条  
おやこ劇場 「伊能忠敬」上映

2003年(平成15年)2月7日(金曜日) (7)

NPO法人・三条おやこ 目玉企画は「子午線の夢」を上映  
劇場 川瀬三子理事長・会 会公民館で、映画「伊能忠敬」を上映する。当日は上映のほかに  
も、伊能忠敬の調査した地  
の複製品など  
も展示す  
る。  
上映する  
「伊能忠敬」  
は、劇団伊能  
座創立五十五  
周年記念作品  
として一昨年  
に製作された  
もの。伊能忠  
敬に加藤剛、忠敬を慕う女  
性我來千恵、娘役に西  
田ひかるといった豪華キ  
ャストが揃う作品。上映時間  
は二時間八分。  
ストーリーは、伊能忠敬  
が隠居後、五十六歳から長  
年の夢を実現するために第  
二の人生をスタートし、俄然  
を演じ始めるまでを描く。  
親子劇場では、「伊能忠  
敬」を上映するために一昨  
年に実行委員会を組織し、  
県央三市の教育委員会や新  
潟大学の新潟地理研究会、

越後ジャーナル

## 良寛のみち



良寛さまを尋ねて

# 学習院大学の伊能図がネット公開

齋藤 仁

学習院大学図書館所蔵の伊能忠敬「大日本沿海輿地図」(伊能図)がデジタル画像として平成一四年度からネットワーク上で公開された。制作にご苦労された学習院大学図書館の担当事務長である中村丈夫氏のお話を紹介し、この伊能図について説明しておきたい。

## 一、電子図書館の伊能図について中村氏の説明から(要旨)

ここでは公開に至るまでの経緯とデジタルコンテンツ化等のシステムの的なことをご説明させていただきます。

デジタル化された伊能図は本学電子図書館システムのコンテンツとして登録されています。電子図書館システムは学内の情報化整備のひとつとして平成一三年度に導入され、システム構築・テスト期間を経て平成一四年度から本稼働しています。伊能図はデジタル化され、インターネットによって配信されどこからでも画像を閲覧することが可能です。

大学図書館所蔵の伊能忠敬「大日本沿海輿地図」(伊能図)のデジタル化についてですが、まず伊能図を撮影しそれをスキャニングしてファイルを作成しました。伊能図自体がそれぞれ約100cm×約200cmもあり、地名などの文字は10mm以下と超細密なため、通常に撮影したのではデジタル化しても文字が判読できないため、4×5インチフィルムを使用し接写による30〜40分割の多分割撮影を行いました。ここでは後で合成することを考慮し、特に均等な照明を必要とし、また、分割

したずれを防ぐために絵図上数センチに風糸を張るなどの工夫をして撮影しました。

最初の一枚目をデジタル化して画像を拡大すると文字が僅かですがぼやけるので、すべての絵図を前述のように再度撮影し直すなどの苦勞がありました。撮影されたフィルムはスキャニングされTIFF形式にファイル化されます。多分割撮影でしたのでこれらのファイルを合成して一枚に仕上げるのですが、それに半月から一ヶ月かかりました。完成したファイル一枚当たり2〜4GBもの大容量になります。MRSIDファイルに圧縮後でも200MB程度はあります。これをコンテンツサーバーからクライアントの要求に応じて配信することになります。

このようにして出来上がった伊能図をパソコンの画面上で閲覧するわけですが、ビューワーによって画像の拡大・縮小、パン表示での移動と閲覧者の望みどおりに表示することができますので、全体図の表示から、極細に記載された地名の鮮明な拡大表示までがシームレスに表示できます。また、実際には肉眼でも読み取れないような文字までも画像が劣化することなく拡大表示が可能であり、一般閲覧者から専門研究者まで満足のいく画像閲覧システムが出来たのではないだろうかと考えています。

▲ホームページアドレス▼

<http://www.glim.gakushuin.ac.jp/e1s/e1s.html>

左記の「電子図書館システム GLIM-EELS 一次情報資料検索および閲覧」を選択、表示されたページの「大日本沿海輿地図(伊能図)」を選択(クリック)。また「統合情報検索システム」からも検索して閲覧可能です。



## 二、学習院伊能図中図の内容

学習院大学図書館に保管されている伊能中図は八舗あり、昭和四四年に元学習院女子部教授堀米次氏の寄贈によるものである。

同氏は、これを昭和二十年八月、終戦による陸地測量部の解散に際し、焼却寸前のものを友人であった山北半次郎氏から譲り受け、入手されたものである。学習院では早速装丁を改め、裏打ちし軸装し、桐の外箱を新調して保存の完全化を図ってきた。

(縦×横の大きさ・cm)

- |   |   |             |
|---|---|-------------|
| 1 | 蝦夷地(東南部)                                  | (119 × 198) |
| 2 | 陸奥・出羽(北部)                                 | (107 × 184) |
| 3 | 陸奥・出羽(南部)・越後・佐渡                           | (100 × 184) |
| 4 | 下野・上野・常陸・下総・武蔵・相模・伊豆                      | (113 × 178) |
| 5 | 能登・越中・信濃・加賀・越前・若狭・尾張・駿河・参河・遠江             | (123 × 181) |
| 6 | 参河・尾張・伊勢・近江・伊賀・大和・紀伊・若狭・和泉・山城・摂津・丹後・播磨・但馬 | (120 × 170) |
| 7 | 因幡・伯耆・出雲・石見・備前・備後・備中・安芸・周防・長門             | (125 × 154) |
| 8 | 阿波・讃岐・土佐・伊予                               | (99 × 150)  |

以上の八舗で九州の部を欠いている。

九州測量は第七次文化八年(一八一二)、第八次文化十二年(一八一五)で学習院図はその前で、原図の制作時期は四国測量後のものと考えられる。

## 三、学習院伊能図の特徴

文化元年の沿海地図中図で現在知られているものは、他に伊能記念

館、国立史料館、徳島大学付属図書館にしかないだけに貴重なものである。学習院中図は江戸時代後期の写本として考えられるとしても、針穴は見つからない。裏打ち装丁し直しのため分からなくなったのかは疑問である。普通は沿海地図の構成は、蝦夷、奥州、中部、関東であるが、学習院中図は奥州を南北に二分して四舗構成になっている。余白には里程標が示され、全体をそのまま二分してある。蝦夷地の部(一)欄外には高橋景保の織語が載せてある。

文化元年の中部の部(五)と文化四年の畿内の部(六)との接合記号のコンパスローズが内陸部におかれ、尾張(名古屋)付近から知多・渥美半島が重複して描かれている。とくに浜名湖の描写の詳細に差がはつきり出ている。文化四年近畿の部(六)は平野部にピンク系の彩色が用いられ、美しさが出ている。

学習院図の最大の特徴としてあげられるのが、中図でありながら大図の記載内容が記されていることである。側線に沿う町村名はもちろんのこと、幕府名・大名領知行所・社寺領などじつにこまかな細字で記入されている。東大総合研究博物館の大和地方の部分を比較してみると分かる。この見事な細字で、技術的にも時間的にもこんな細かな記入事項を模写するのは、よほど例外的な必要性があり、諸条件が揃ってできることであろう。例えば、全国の所領を総覧してみてもいいからだろうか。近畿の部(六)の端には、沿海地図の凡例、伊能勘解由謹図の識そのままに写した別紙が貼り付けてあり、末尾には安政五年六月、熊谷市兵衛写とある。地図模写年代はもう少し古いと考えられるが、余白と便利さのため貼り付けたのであろう。

中国の部(七)は、九州測量以前のため中国地方の内陸部は空白であり、ややさびしい図となっている。瀬戸内海側の島嶼の間隙をぬって境界を設けたので、図の(八)との接合記号のコンパスローズが貧

弱ではあるが描かれている。

#### 四、明治以降

学習院中図八舗には全て「陸軍文庫」の蔵書印があり、一部に消えうとした跡が残っているものもある。

陸軍文庫へどのような経路で入ったか分らないが、陸地測量部にあったのは確かである。先述したように、堀教授が陸地測量部の解散とともに友人（同郷）から譲り受けたことになっている。

関東の部（三）には、鉛筆で精密ではないが方眼線が記されていて、いちばん使用したのであろうか、擦れた汚れが目立っている。他にも中国の部（七）の一部と四国の部（八）は、伊予北部の松山・今治・石鎚山にかけて、かなり細かな方眼が集中的に記されている。これも決して精密ではないが、明治以降の複写の方法で、この伊能中図より模写しようと試みた証拠である。

当時の動きとしては、陸地測量部で三角測量を開始したのが明治一六年（一八八三）であり、それまで当面の必要に応ずるには伊能図に頼るほかはないと考え、明治五年に伊能家から大・中・小図の副本その他の資料を借り出している。これは当時の工部省測量司の名で借用証書が提出されている事実がある。そして内容の不足部分は天保図などで補い、模写をはじめている。明治一〇一二年に伊能中図と同一縮尺の軍管図が第一から第六軍管区ごとに編修している。しかしこれはもともと陸軍の応急使用のためのものであり、一般社会の利用に供するものではなかった。明治一七年から軍管図よりさらに精密な輯製二十万分の一地図一色刷の作製にかかっている。一方、海軍水路部でも伊能図を内務省地理局から借り出し模写し、その精密な海岸線に基づいて、海図の作製をはじめている。本図も写図の候補であった

かもしれない。

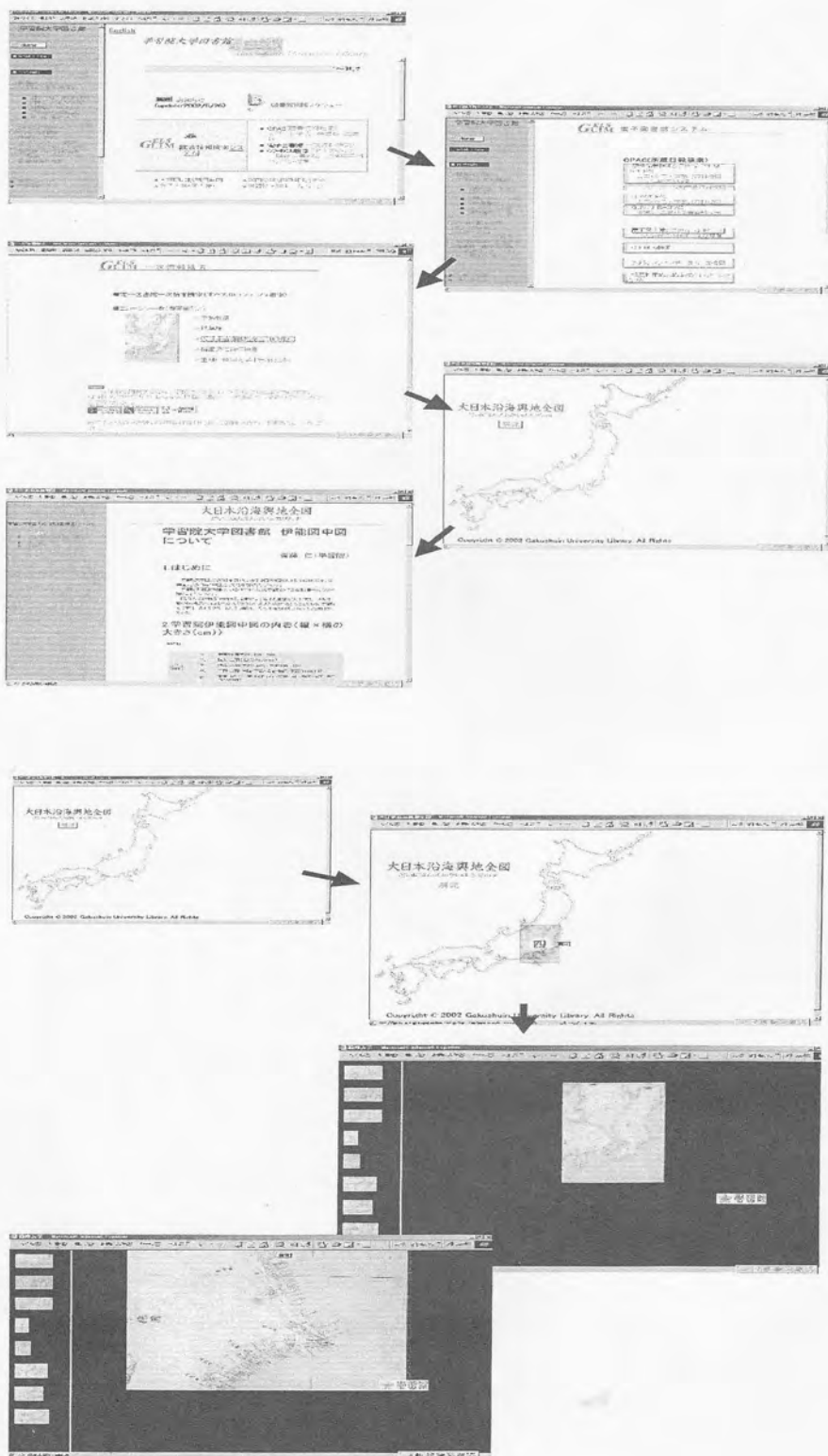
#### 五、おわりに

以上のような伊能図の利用と貸借関係はよく分らないが、学習院中図が戦前の陸地測量部にあったことはおそらく、どこかの大名家にあったものが、明治年間に貸し出され、そのまま返却されずに置かれ、終戦直後の混乱により焼却されようとしたものである。

甲南大学の久武哲也教授が平成七年（一九九五）一二月、イタリア地理学協会所蔵の日本地図コレクションを調査された際、伊能図を見され、その構成が学習院中図に似ていることから、伊能忠敬研究会の渡辺一郎、清水靖夫両氏とともに来院調査された。その結果、図幅構成はピッタリ同じであった。写真照合では、地名が、位置はそのまま、国名、郡名まで全てカナに置き換えられていた。学習院中図と原図を同じくする伊能図のカナ書き版がイタリアにあったということに極めて興味深いことである。



大学図書館



## 初詣と伊能忠敬

待野 貞雄

わが家の初詣は、深川の富岡八幡宮である。別名「深川八幡宮」とも呼ぶこの神社は、東京都江東区富岡一丁目にあり、地下鉄東西線の門前仲町から歩いて五分ほどの所にある。

わが家がこの神社に初詣に行く訳は、最寄り駅から電車で一〇分という近い距離にある有名神社であること、また隣の街区には、深川不動というこれも有名な不動様があり、同時に参拝できるという便利な場所だからである。それも元日の午後になる。

この神社には、会員諸兄は既に会報等でご承知のとおり、調査士会員も浄財を寄付した伊能忠敬の銅像が参道の脇にあり、すぐ横に測地2000による最初の国家基準点も設置されているが、元日は銅像の近くに寄れないほど混雑する。

私の大晦日は、午後に孫たちを連れてこの神社と不動様に年納めの参拝に行く。人出の少ない銅像の前で立ち止まって話をしている子供連れを眺めていると年の瀬の喧騒を忘れる。帰りには係たちの好物の甘栗を買うことにしている。

夜は、すぐ近くにある稻荷神社で年越しの行事がある。家に帰って寝るのは三時を過ぎているので、当然ながら元日は朝寝。わが家の初詣が午後になるのは、人出の混雑が緩んだ時間と私の都合とが一致するからである。

ところで、一昨年九月、伊能忠敬研究会代表理事の渡辺一郎さんから日調連に連絡があり、伊能忠敬銅像建立を記念して「江戸の伊能忠敬」を発刊するので、忠敬の旧跡を現在地に特定して欲しいとの依頼を受け、東京会の私が担当することになった。

江戸の忠敬の旧跡といえば、寛政七年（一七九五）千葉県下総佐原から江戸に出て最初に居住したのが深川黒江町（江東区門前仲町一丁目）。ここから高橋至時に師事するため鳥越（台東区浅草橋三丁目）にある司天台に通っている。

忠敬の歩測練習の図によると、自宅から北上して両国橋を渡り司天台、浅草観音（浅草寺）から吾妻橋を渡り隅田川の東側を両国、白宅まで歩測の練習を重ねている。この図面には、距離、方位角の記載があるが測量初期の歩測であり、東京都作製の2500分の1地形図と比較して距離で20%短く、角測定の精度も不安定である。仮に一間六尺五寸竿？にしても8%弱。江戸期とはいえ、天文学を学び測量に情熱を傾けた忠敬が、地押丈量まがいの間を使ったとは考えられない。歩測練習の図面は、未熟な歩測で相当の無理をしたのか謎を残している。

その後、文化十一年（一八一四）八丁堀亀島町（中央区日本橋茅場町二丁目）に引越してここを地図御用所とし、文政元年（一八一八）この地で終焉した。

これらの場所は、大正十二年（一九二三）の関東大震災による被害を受け、震災復興区画整理事業によって大幅に地形が変更した地域である。

図書館、本屋を回って集めた資料を分析した結果、位置特定に使え

る資料の分類は、①結構正確に道路等が描かれている忠敬「江戸府内図」の測量下図。②精度に問題はあるが克明に屋敷名等が記載してある江戸期の絵図。③精度に疑問はあるが江戸期の地形の名残を残す明治期の区画図と地形図。④震災復興区画整理完了後の昭和期（昭和一六年）の区画図。⑤現在の地形図と住宅地図の五種類である。

現地を踏査した結果は、道路の拡幅、橋の架替え等による経年変化が激しい。その上江戸期の絵図と対比し、全体と部分とを理論的に整合させるには無理がある。

位置特定の精度を一〇メートル範囲と目標を定めたが、パソコンによる重ね図を諦め、それぞれの地図を縮尺修正して年代順に、また部分的に重ねながら図解的な調製をすることにした。

その後、伊能忠敬の江戸日記からの新たな情報を得て部分修正を加え、最終報告をしたのが昨年五月の連休過ぎとなった。

江戸期の絵図面を眺めるだけなら結構楽しいものだが、これを現在に重ねる、現在を江戸期に重ねる、そして部分部分を整合させることは、絵図や古文書と現代地図の情報の対比に格闘させられた伊能忠敬ゆかりの地の探しとなった。

今年も初詣は、苦勞させられた忠敬さんに一層の愛着を抱いて深川八幡宮に参拝した。

（まちの さだお・日本土地家屋調査士会連合会副会長）

＊編集部注

筆者の待野氏は銅像建立報告書・保存版にて「忠敬隠宅と地図御用所跡考証」を著されました。



地図御用所跡

中央区日本橋茅場町16



司天台跡の碑

台東区浅草橋3丁目



芳名録より

―佐原伊能家を訪れた人々―

十一屋

五郎兵衛も

いこに

梅の花

羽間 生

芳名録を初めて手にした時から、特に気になっている署名が幾つかあるが、これもその一つだった。

間重富ゆかりの方ではないかと、是非ご子孫と連絡をとりたいものと思い続けていた。数年前に神戸会員からご子孫についてご協力を得ていたが、やっと実現してこのご署名の主、羽間平三郎氏のお孫さん平人さんにお目にかかり、いろいろとご教示頂くことができた。嬉しさこの上なしという次第である。

羽間平三郎氏が佐原へお出でになったのは、前後の方の署名が「昭和十八年三月四日」と「四月二十一日」とあるので、十八年の春に違いない。

この平三郎氏が間重富の顕彰に力を尽くし、羽間文庫を設立された方となれば、戦中にもかかわらず大阪から佐原までお出でになった心意気も頷ける。その頃祖母・孝のもとに疎開していた洋も、或いはお目にかかつていたかも知れない。

芳名録にご署名下さった方のお顔を拝見するのは、初めてである。お借りした資料の中から、平三郎ご夫妻を紹介させていただく。

平三郎氏は明治二八年生まれ、戦前には方面委員、大阪市会議員、戦後は大阪府貸家組合連合会理事、会長をつとめられたこともあった



羽間平三郎氏夫妻

が、代々の地主で、毎日五合の酒をたのしみながら、もっぱら祖先に関する資料の収集に励んだという。家計はすべてカエ夫人にまかせきりだったそうで、またこの夫人が大した女傑だったらしい。ご夫婦ともすでに物故されており、写真を見せていただくと、風容もまことに対照的だ。平三郎氏は一徹者らしく瘦躯の背をピンと立て、八字ひげをはやしているのに、夫人は体格大きく表情もゆつたりして大地のおもむきである。写真を見ながら長男の平安氏夫妻や長女の浜本正女さんの話を聞くと、似た者夫婦のまる反対で、税金も家計もすべて夫人が一手に切り回し、また町の人はもちろん乞食にまで慕われるような母性の持ち主だったらしい。(足立巻一氏「羽間文庫のこと」より)

「重富は質屋で資産があったと諸人は言うけれども、隣家よりの類焼で一庫を残すのみとなり、家の再建と商売の再建奔走のなかでの学問であったのを知って欲しい」と平三郎は常に言った。資産の乏しい中を血の滲む思いで文庫充実に力を注ぐ自分を重ねた言葉であろう。

(「大阪春秋第八〇号」に寄せられた浜本正女さんの文より)

羽間文庫の充実に一生を捧げられた平三郎氏について、さまざまなエピソードを関西大学博物館叢報「肝陵」で羽間平安理事長が語られているが、その内容、語り口をお伝えできないのが、とても残念である。特に、羽間文庫の超宝物「兼葭堂日記」への情熱には、ただ脱帽してしまった。秋の研究会旅行の折に、改めてその業績を偲ぶ機会を持ちたいものと思っている。

※もともとの羽間(はざま)姓を、重富の時に間(はざま)としたそうである。

(伊能陽子)

## 芳名録参考資料

※木村兼葭堂ーきむら けんかどうー（一七三六ー一八〇二）

江戸後期の本草家。名は孔恭、字は世肅。別号、巽斎（そんさい）。

大阪北堀江に酒造業を営む。小野蘭山に本草学、池大雅に絵を学ぶ。

奇書・珍籍・書画骨董を蒐集。日記を残す。

（広辞苑）

松浦静山や増山雪斎といった風流な藩侯とも親しく、北堀の自宅には大田南畝や谷文晁、田能村竹田といった文人墨客、そして大槻玄沢や司馬江漢、長崎出島のカピタンまでもがやって来た。また地図コレクターでもあった彼は、『大日本細見指掌全図』（文化五年刊）を校訂している。

（芸術新潮四月号より）

## 芳名録解読のお願い

前号の「こぼれ話」にて伊能陽子さんよりお話のありました「芳名録」の解読をご教示お願いいたします。何か思い出などあれば編集部宛お寄せ下さい。

今回は以下のA・B・Cの三点です。

（編集部）



## 芳名録 A

伊能先生の  
芳名録  
大田玄沢

あに  
あに  
あに

芳名録 B

氣志也  
神

昭和三年

夏八月

永興謹書

芳名録 C

永矢不

復

大正四年四月二十日  
陣中陣中先生文及  
因且親筆訓致不忘  
之意  
佐藤氏謹書

\*訂正とお詫び

前号の吉川英治氏の解説で一行目が『即菩薩』となっており  
ましたが、正しくは『即菩提』

即菩提  
即煩惱乃  
月夜かな

英治  
です。お詫びして訂正します。

(編集部)

写真で訪ねる忠敬先生の足跡

## ホームページ伊能図書館に「史跡めぐり」を開設

前田 幸子

### 「ゆかりの地」と「全国測量ルート」

伊能忠敬に関する図書や文献資料を集めたバーチャル図書館「伊能図書館」は、一昨年十一月の開館以来、この一年半で二万三千人を超える入館者を数えました。「図書閲覧室」で単行本を、「文献資料室」で雑誌や文献資料を紹介するほか、「休憩室」に「伊能忠敬史跡めぐり」を設けて忠敬ゆかりの地の写真を展示していましたが、このたび「写真資料室」として改装オープンしました。忠敬の生涯をたどる史跡のほか、一〇次に及ぶ全国測量の記念碑などを紹介しています。今後、各地にある伊能測量の史跡を順次紹介し、関連情報も充実させてゆく予定です。

### 「測量之碑」と「星座石」

忠敬の史跡は佐原の忠敬旧宅など著名なものもありますが、あまり一般には知られていないものもあります。岩手県金石市唐丹の丘に残る「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」は同時代の学者が忠敬の学識と偉業に感銘し、忠敬存命中に建てた石碑です。江戸時代に建てられた伊能忠敬の顕彰碑として唯一のものであり、その傍らに残る星座石と「地球の微動あらざらんか」という謎の言葉とともに、当時の科学者の真理探究の情熱を伝える貴重な史跡です。このような知られざる史跡を忠敬ファンを始め多くの人々に知ってもらうことも「史跡めぐり」の

目的のひとつです。

### 「浅草司天台」と富士山

一方、その名はよく知られているものの、一体どんな施設だったのか想像がつきにくいのが「浅草司天台」です。現在残っている絵図で見ると、それは大きな物干し台のようなもの。葛飾北斎が描いた富嶽百景「鳥越の不二」には物干し台に設置された渾天儀の向こうに富士山が描かれています。当時としては奇観というべき風景だったのでしょうか。現在の町並みには当時をしのぶようなものはありませんが、「史跡めぐり」の絵図から当時の天文台の様子を想像して下さい。

### 「偉人」「偉業」の実像を探る

伊能忠敬は、戦前は国定教科書に登場し、戦後も社会科の教科書に登場するため「偉人」として作り上げられたイメージが強く、その実像はあまり知られていません。また十七年間にわたる全国測量は「実に非常の大業、不朽の偉勲」とされ、常人の及ばざるものとして「偉業」の一言で尽くされがちでした。しかし伊能忠敬は超人でもなければ天才でもなかったと思います。その生きた軌跡、歩いた足跡をたどることで「人間伊能忠敬」に親しみをもち、理解する手助けになればと思っています。

「伊能図書館」は伊能忠敬に関する情報の集積所としてますます充実を図っていきます。どうぞご期待下さい。

なお、この図書館への入館は伊能忠敬研究会のホームページからお入り下さい。

(伊能忠敬図書館・館長兼司書)



## 写真資料室

## 伊能忠敬史跡めぐり

## 「伊能忠敬出生の地」(千葉県山武郡九十九里町小関854番地)

伊能忠敬は1745年(延享2年)1月11日(旧暦)、上総国山辺郡小関村小関新田で小関貞恒・みねの三人兄弟の末っ子として生まれた。幼名小関三治郎。満6歳の時に母みねが死去、入婿だった父貞恒は長男と長女を連れて実家神保家(現横芝町)に戻る。次男三治郎は満10歳の時に父の元に引き取られるまでここ九十九里の網元で名主でもあった小関家で育つ。その場所は現在伊能忠敬記念公園となっており、公園には象限儀とともに天を指し示す伊能忠敬の銅像が立っている。



伊能忠敬銅像



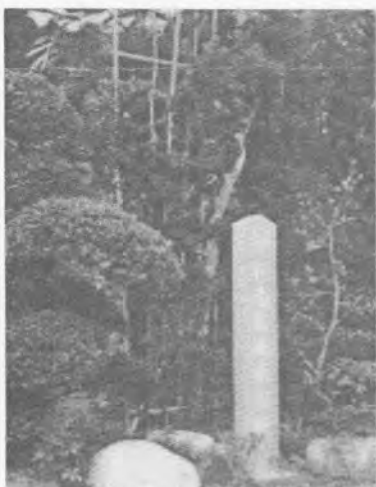
伊能忠敬先生出生之地碑



生誕250年記念切

## 「伊能忠敬成長の地」(千葉県山武郡横芝町小堤72番地)

忠敬(幼名 三治郎)は1755年(宝暦5年)10歳のとき、小堤村に戻った父・神保貞恒のもとに引き取られる。神保家は戦国時代から続く旧家で名主を勤める名家であった。神保家に幕府の役人が泊まったとき、計算に興味を示す三治郎にやり方を教えたところ、たちどころに覚えてしまったので役人が驚いたという逸話が伝わっている。以後、17歳で佐原の伊能家の婿養子になるまで父・貞恒、兄・貞詮、姉・房と四人で暮らした。父・貞恒はその後新しい妻を迎え、神保家のすぐ近くの丘陵の麓(横芝町小堤44番地)に分家して村塾を開き、生涯そこで暮らした。



<http://www.tt.rim.or.jp/~koko/salon.html>

## 「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」と「星座石」岩手県釜石市唐丹町大

曾根237-1

三陸海岸の小高い丘に残る「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」は江戸時代に建てられた伊能忠敬の顕彰碑として唯一のものである。伊能測量隊は享和元年(1801)9月24日南部藩との境界にあたる伊達藩唐丹村で実地測量をした。地元の学者葛西昌丕(まさひろ)当時49歳は忠敬の学識と偉業に感銘を受け、13年後の文化11年に「測量之碑」を建てた。忠敬69歳で存命中のことであった。碑にはこの地の緯度(39度12分)や唐丹測量を記念する文言が記されているほか、「地球の微動あらざらんか」という謎めいた言葉が刻まれている。これは西洋の天文学から「地球の微動」を知った昌丕がその解明を後世の人に託したものではないかと考えられている。また傍らには「星座石」と呼ばれる40センチほどの平たい石がある。星座石は、中心に円が描かれ、円の中には「北極出地三十九度十二分」、円の周囲には十二宮と十二次が交互に配列されているが、この星座石の意味はまだ解明されていない。「地球の微動あらざらんか」の言葉とともに当時の科学者の真理探究の情熱を伝える貴重なものである。



「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」



星座石



案内標石「地球の微動あらざらんか」

## 「高輪大木戸跡」(東京都港区高輪2-19)

高輪大木戸は徳川幕府が宝永7年(1710)東海道の左右に石壁を築き木戸を設けたものである。この木戸は江戸の重要な入り口として規模も大きく、往来の客はここで旅装を改めまた江戸の送迎者もこの木戸までとされていた。伊能忠敬は東海道筋の測量に際してここを便宜上の基点とした。旧説明板には「また享和年間(1801年-1803年)伊能忠敬が全国を測量した際、ここを基点としたため測量史上貴重な遺跡となっている。」と記されていた。木戸は明治維新後廃止され、現在は片側だけ残されているがこの場所は第一京浜国道の交通量の最も多い地点であり、道路拡張のあおりで取り残されたようにわずかな石垣の名残が片隅に保存されているばかりである。



伊能家文書紹介 二十三

高橋景保「御用日記」より

安藤 由紀子

景保の初仕事

文化二年二月二五日、伊能隊は第五次測量に出発した。西国測量をこの一回で終わらせようとする壮大な計画であった。景保の弟善助(後の渋川景祐)を含めて二人の士分が加わった上下十四人の混成部隊で、幕府直轄の事業であった。手当を貰い支配機構を利用できるようになった反面、二百年以上続いた幕府の官僚組織を動かさなければ、現地の測量も動かない仕組みとなった。現地との間に多くの関門を作り、何重もの間接性が権威を強化するシステムに伊能隊もまきこまれる羽目になった。

幕府の権威と測量隊の間にたって、一切の複雑な事務が二十一歳の景保の肩にかかることになった。隊の一行が何の懸念もなく測量に専念することができた裏には、総監督としての若年寄堀田撰津守や勘定所・奥御右筆等を相手に面倒な折衝にあたった、この若者の労苦があったことを忘れてはならない。

ちょうど第五次の「高橋御用日記」が伊能忠敬記念館に所蔵されているので、これに従って彼の労苦の跡をたどってみたい。

先ず彼の初仕事は、勘定奉行や道中奉行に、各宿村々の問屋・年寄・名主・組頭に宛てた触書を出させることであった。また一行が出発した三日後、京都町奉行に次のような書簡を送った。

「高橋御用日記」

二月二十八日

伊能忠敬記念館蔵

(前略) 此度私手付伊能勘解由、ならびに私弟善助外下役二人、西国筋測量のため出張につき、御地通行いたします。右の件御地へ通達があったことと存じます。

すなわち去る廿五日朝、内弟子も連れて上下十四人江戸を出発いたしました。通行筋は、東海道を桑名へ出、南海道に従い紀州浦を通り大坂へ出、五月頃御地へ到着と存じます。もつとも雨天その他で逗留の事もありますので、遅速のところは図りかねます。御地到着の上：：大津へ出、北海通行の積りにしております。詳しい事は、勘解由到着の上申し上げます。測量と地図仕立てのため、宿泊所は狭くてもよろしいので、一行すべて同宿になるよう取り計らってください。どうしても出来ない時は、近辺に別宿をご用意くださるようお願いいたします。(後略)

大坂町奉行にもほぼ同文のものを送った。

六月一日の「日記」には、忠敬が出発前に注文しておいた測器類が時計師弥五郎から届いたので、御用先紀州新宮まで届けねばならず、荷物の発送をめぐって、寸法・重さなど勘定所との面倒な折衝の往復文書がいくつも残されている。

市野金助と下河辺政五郎の交代

混成隊であったため、士分の下役と内弟子たちとの間に軋轢があったらしいことは前に述べた。病氣と称して下役の市野金助は帰府することになり、代わりに下河辺政五郎が江戸を立った。この交代も書類

上大変に手間のかかるものであった。一行はそれぞれに出発まえに手当等先払いで受け取っていたので、金助は残りの金額を返済しなければならなかったのに、治療費などに使ってしまったて即時に返済することができなかった。これについても、勘定所・奥御右筆へ十年年賦で返納する交渉が必要であった。

「高橋御用日記」 文化二年 九月

(前略) 市野金助は、病気に付き帰府いたしました。先日くださったお手当等受け取りすぎに当たる分、日割りで返納するようおおせ渡されました。……

月数八ヶ月、日数百九十九日勤務いたしましたので、受取の分より差し引き残り、……返納いたすべきところ、金助小身者の上、出発の支度及び病氣のため雑用多くなり、残金十八両のみゆえ、今回これを返納いたし、あとは来年より十ヶ年賦にて返済いたしたく、お願い申し上げます。以上

丑 九月 高橋作左衛門

この願いは、奥御右筆を経て、堀田摂津守へ提出され十一月に到り聞き届けられた。代わりの下河辺政五郎は、元来西丸書院番、山口和泉守配下の同心であったので、先ず和泉守の承諾をえなければならずまた出発に当たっては、沿道通行の手配から旅費についての勘定所あいての交渉等、これまた何通もの往復書類が残っている。

隊員の増派要求

忠敬からは次のような増員の要求がきていた。

「高橋御用日記」 閏八月

(前略) 紀州一国すべて入海出崎多く、海岸絶壁大岩石、ことに波浪荒く、船による測量たいへん難しく、絶壁を伝いまたは岩石に取り付き、上下ともようやく測量のため、波浪をこうむり巖石より落ちて、怪我人もでております。私はかねてより覚悟の上ですが、下役・内弟子の者まで難儀の上紀州は南へ張り出している国のため、特別の大暑で病人も絶えず、手分けの測量も差支えをきたしております。……大坂まで三ヶ月と見込んでおりましたが、六ヶ月もかかってしまいました。大坂・京都・江州測量中所々にて耳に入り、また調べましたところ、中国は島々多く、北国海辺は岩石難所にて、風波ある時は測量出来ないようすで、四国九州は島々入海も多く、蜂の巣・珊瑚樹のように入り組んでいるそうです。……これまでの様子ではあと何年かかるか分らない状態です。何卒一年も早く済ませたく測量手伝いあと四五人増員していただくよう、お願い申し上げます。そうすれば少々病人が出て測量手分けにも差支えなく、病人の出ない時は、方位・推算・地図の下書きも可能です。右御判断の上、増員方お願い申し上げます。

閏八月 伊能勘解由  
高橋作左衛門殿

いざ人選にかかってみると、測量技術を身に付けているものは、そう簡単にはみつからない。また忠敬の心になわぬものでは、かえって心労の種にもなりかねない。景保は忠敬自身や他の隊員との協調和合にたいへん気を使って人選を考えた。東嶋平橋という鍋島藩の家来



が、かねがね測量に加わりたいと願っており、象限儀も持っているというので忠敬に打診してみたが、

伊能忠敬書簡 X十三 高橋景保宛 文化二年九月二十二日

天津博物館藏

(前略) さて東嶋は、鏈を持つような格の方でしょうか。あるいは鏈以下の格の方でしょうか。もし鏈供侍や、ぞうり取りなど引きつれてやってくるとなると、無益な人数も多くなり止宿にも差支え、今まで難所のご丹誠をなさった方々より手際不案内なのに上格に見えるようでは、一同仲良くというわけにはまいりません。大手分けさえしなければ、象限儀は一つあれば十分です(後略)

又たとい増員ができたとして、大きく二つに隊員を分け、何十日も分かれて測量を行う「大手分け」をすれば仕事は捗るが、別働隊の隊長をどうするかが問題で、一番頼りになる坂部貞兵衛を推薦してみたけれども、忠敬と長く分かれたのでは、弟子たちの統率に自信がな  
いと断ってきた。

景保は、各方面と相談の結果、中国筋の測量を終えた段階でいったん帰府して休養の上、改めて四国・九州の測量をする以外に手がないと考えるようになった。間重富も桑原隆朝も、御右筆の秋山松之丞も同意見であつた。御右筆は、「先日から色々考えてみたが、中国地方を先立て再度出張の方がよろしく、内々堀田摂津守へ伺つてみよう」といつてくれた。そこで景保は、以下のような伺書を書いた。



「高橋御用日記」

十月十四日

(前略) 右之通り二段に致し、今度は中国筋・隠岐限りにて帰府できるとなれば、行く先に限りが見え、隊員何れも氣力が出て測量にも励みとなり、おのずから病人も稀になることでしょう。もつとも中国・隠岐のみになつても、寅年(文化三年)に終わらせるのは難しく、翌卯年にも残ることと存じます。……今度いったん帰府いたさせたく御伺い申し上げます。

丑 十月

高橋作左衛門

この伺書は内々に御右筆に見せて同意を得、彼を通じて堀田摂津守に提出された。二十六日許可が下りて、急ぎ忠敬に知らされた。

また計画では山陰道を先に測量することになっていたが、予定が大幅に遅れてしまいこれから冬にかかるので、山陽道から取り掛かるよう行程の変更があつた。景保はその旨、沿道の村々への先触の書換えをしなければならなかつた。結局はじめの見通しは、あらゆる点で甘かつたのである。

忠敬からの増員要求は、このあとも続いた。景保はこれまた各方面に交渉の上、氣心も知れ経験もある内弟子、門倉隼太と尾形頼次郎の派遣を実現させた。

隊員の不行跡

一行は、岡山で越年した。翌文化三年五月頃から忠敬は大病となり、長く測量を休んだ。長期にわたる出張であつてみれば、隊員の素行上

も問題が起こりがちであり、とくに先も見え、忠敬の引きこもりが続いたため、人々に心の緩みが出て、不行跡が表面化した。そしてついにこのことは、若年寄堀田摂津守の耳に達した。

九月十三日、御目付より景保に登城命令が出され、翌十四日堀田摂津守から次のように言い渡された。

「高橋御用日記」

九月十四日

(前略) 伊能勘解由御用先の件、中国・山陽道辺までは、取り締まりよろしく勤めていた由であるが、長州あたりより追々取り締まり緩み、石州・伯州・雲州あたりに到つて、不行跡が伝えられてきている。

宿々において無用の人足を徴収し、あるいは酒宴などいたし、酌とり女など差し出させ、下々の者などは買物物の代をも払わず、また宿々で食事の品数の少ない時は、みだりにこれを罵り、その上食器等こわしたりすることもある由、あるいは一人で手分け測量、船を用いたりする節、船中へ酒肴を取り寄せたりいたし、取り締まり甚だよろしからざるよう伝え聞いている。最初は勘解由の耳に入らなかったようだが、次第に増長し、いまでは勘解由もおおよそ承知之由、もはやいったん帰府の時期も迫っているが、勘解由はまだこれから四国・九州へも出張するべき大切な身分であるから、これらを放置して途中何か起こつては困るので、ちよつと、注意してやつた方がよい。(後略)

この「御内意」は、測量の重大性と忠敬の役割を考えた思いやりのあるものであつた。景保はたいへん恐縮して、こうした事件は、下々

の者の仕業であり、忠敬が長州から大病で引きこもっていたために起きたものであること、下々の者は田舎者で御用を權威と履き違えていること、忠敬は本来の御家人ではなく、仕事に熱中するタイプで、回りに目が届きかねること等をあげて陳謝した。そして勘解由宛の諫めの手紙を御用飛脚で送達した。忠敬からは十月十五日付けで、釈明の返書があった。

帰府の後忠敬は内弟子三人を罷免し、坂部貞兵衛とともに「進退伺い」を出し、「おかまいなし」となつて一件落着した。

景保はよほど懲りたと見えて、後の四国・九州の測量中隊員の不祥事が無いかどうか確かめ、注意を怠りないようとの私信を何度も送っている。

高橋景保書簡

伊能忠敬宛

文化九年三月十九日

此度は下役の者ども不行跡はないでしょうね。充分お気をつけください。長いご旅行のこと故何時と無く自然に不取締りになつてしまふもの。絶えずお心にかけておいてください。遠国廻浦は今度限りですから、ことに重要です。このたび又この前のような事が起きれば諺にいう「百日の説法屁一つ」とやらしいことになりますから、江戸にいて安住しているものでも只この事のみ心配しております。

以上述べてきた景保の苦勞は、氷山の一角であつて、気の遠くなるような雑務の連続であつた。地図作成のために司天台の敷地の中へ地図御用所を新築する件なども上申したが、さすがにこれは認められなかった。波乱に満ちた第五次測量はかくして終わった。

幕府が大筋において景保の要求を入れたのは、緊迫化していた国際

情勢のもと、どうしても沿海を主とする日本全国を必要としていたことによる。蝦夷地測量にはじまる忠敬の技術の優秀さもさることながら、これに劣らず力のあつたものとして、幕府の景保に対する絶大な信頼と、彼の裏方としての交渉と尽力、その外交的な手腕を見落としては、歴史の一面のみを見ることになってしまう。

すでに見てきたように、若年寄堀田撰津守の景保に対する信頼はこのほか厚かつた。堀田は寛政二年にその職に任じられて以来、四十年もその地位にあつて、幕府の文教面で大きな功績をのこした。老中首座の松平信明ら当時の幕閣は、事実を探索することに大いに興味をいだいており、伊能図の成功は為政者のこうした合理的態度にも支えられていたのである。

#### 参考文献

上原久 「高橋景保の研究」

「高橋御用日記」

保柳睦美 「伊能忠敬の科学的業績」

伊能忠敬 「江戸日記」

伊能忠敬書簡 X十一

高橋景保書簡集

講談社

伊能忠敬記念館

古今書院

学士院写本

大津市博物館

伊能忠敬記念館



# 伊能忠敬測地原図

渡辺 一郎

伊能忠敬測地原図と題して東京大学総合図書館に所蔵されている忠敬の測量下図については、平成六年（一九九四）「古地図研究」誌上に発表したことがあるが、記録に残すため、若干補足して再録する。

## 一、概括

本図は伊能記念館で測量下図として整理されている図と同じ形式の、測量結果を墨線で示した、地図作成用の下図、つまり突手本である。測量作業の単位となるブロック毎に美濃紙程度の大きさの用紙に分割して記載し、方位線の目標となる著名な高山・島などの位置も記している。この図の下に地図用紙を置いて、屈折点と目標点に下図に残っている針穴に合わせて上から針で穴を開け、測線と主要目標の描画位置を写した原図である。

紙質は丈夫な和紙であるが、裏から見ると墨線に沿って針穴が無数に連続しており、縮小度の大きい小図の原図ではギツシリと針穴が連続している感じである。よく穴が連続して破れてしまわないものと感心する。余程丈夫な紙質の紙を選んでいたのである。また、簡単なように考えられる針穴による複写は細かい大変な作業であることがわかる。

針穴からみて、本図は何回か使用されたように見受けられる。対象地域はばらばらで、ある特定の地域あるいは時点の測量結果ではない

が、用紙のサイズは大小の二種類にほぼ統一されている。

## 二、種類、数量等

故岡博士によれば、東京大学総合図書館蔵の測量下図は93枚（小図57枚、中図36枚）とのことであるが、筆者の調査ではつぎのとおりであった。

小図 59 枚	大形 概ね 32 cm × 47 cm	3 枚
	小形 概ね 23 cm × 33 cm	56 枚
		三分一里
中図 34 枚	大形 概ね 32 cm × 47 cm	32 枚
	小形 概ね 23 cm × 33 cm	2 枚
		六分一里
大図 1 枚	大形 概ね 32 cm × 47 cm	1 枚

全体を「伊能忠敬測地原図」と題する 38 cm × 53 cm の桐箱に納められており、貴重書扱い（請求番号 A 00.45.9）となっている。閲覧は目的を述べて事前にハガキで申し込む必要がある。

## 三、特徴

同様な形式の下図は芝公園の三康図書館（旧大橋図書館の蔵書を引継いでいる）も所蔵するので、突合させたところ、東大の原図の欠番と三康図書館の原図番号と接続する部分があることがわかった。東大の原図と三康図書館の原図は、もともと一体だったものが、何らかの理由で分散保管されているものと考えられる。

本図の下図部分の描図形式は一定であるが、その他の書込みは次に示すようにまちまちである。

- A・タイトルを裏に書くものと、表に書くもの、無いものがある。
- B・タイトルを〇〇街道何番と連続表示するものと、単に地名で何処から何処と示すものがある。

C・図の範囲を、詳細に△△界から□□界と表示するものがある。

D・下図に枠を描くものと、ないものがある。

E・作業日を記入するものと、しないものがある。

F・朱を使ったものと、使わないものがある。

G・作業者の名前の入ったものがある。

などで、特定の小数の者の手によるものではなく、多数の人々の合作と思われる。

#### 四、原図94枚のリスト

原図94枚のリストは以下のとおりである。整理番号は東大の整理番号である。番号は93番までであるが、26番が重複しているので、94枚となる。図名はあるもの、ないものがあるので、代表的な地名等を付したものである。

各図ごとに小型の東大蔵書印がある。

整理番号	図名または掲載範囲	区分
1 自	身延山山門 至 福土村	小図 大
2 自	辻堂村東海道追分 至 大山歴て田原村制札	中図 大
3 自	熊谷より川越経て 至 入間郡大仙波新田	中図 大
4 自	深川測処 至 千葉大堀村	中図 大
5 自	信州洗馬宿 至 川中島塩崎	中図 大
6 自	飛州無數河村 經 高山至信州敷原宿 (野麦峠越え)	中図 大
7 自	信州佐久郡借宿村 至 武州児玉郡本庄宿制札 (途中、多古碑に寄る)	中図 大
8 自	周防國吉敷郡 至 東佐波、地福村	中図 大

山口道場門前町 宮野村、亀尾川峠

9 自 豊浦郡小月 至 萩 中図 大

10 自 出沢・大海郡界 至 岡崎諏伊街道2 小図 大

11 自 根羽宿(信州) 至 飯島宿(岡崎) 小図 大

12 自 葛西川より亀戸村 經 入船町 大図 大

13 自 甲信界 至 身延山 中図 大

14 善光寺・飯山・松代・屋代 至 和戸川田村 中図 大

15 中山道6 諏訪湖周辺 中図 大

16 中山道5 恵那付近 中図 大

17 中山道 鳥居峠付近 中図 大

18 作州大庭郡下長田村付近 中図 大

19 西国街道⑤ 備後國川北村―安芸國豊田郡本郷村 中図 大

20 西国街道⑥ 本郷村―上瀬野村 中図 大

21 西国街道④ 岡山・神辺附近 中図 大

22 西国街道① 淀より神戸 中図 大

23 摂州より播州へ 中図 大

24 37番 自 田老村 至 唐丹 中図 大

25 38番 自 唐丹 至 岩尻村 中図 小

26 4番 自 白川 至 矢吹 中図 大

26 A 5番 自 矢吹 至 清水町 中図 大

27 西国街道③ 自 揖西郡正条 至 岡山 中図 大

(筆者注 西国街道の下図で、欠番となっている②⑦⑧⑨は東京芝の三康図書館所蔵)

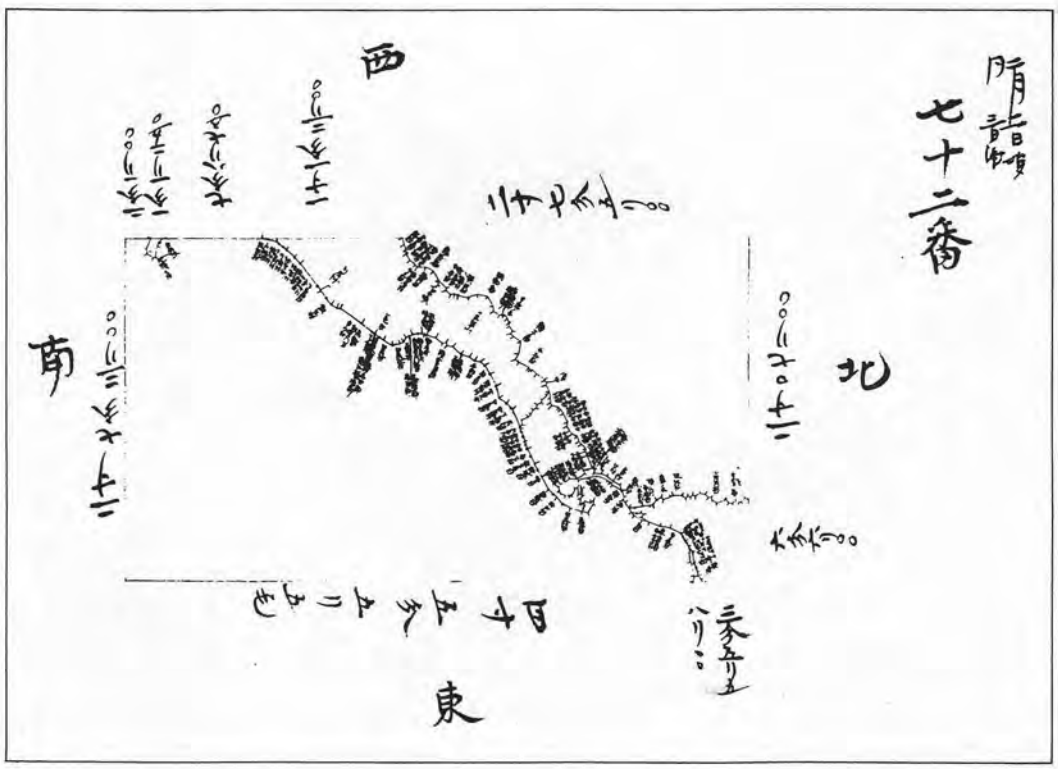




93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	(筆者注 第115 117の各図は三康図書館所蔵)		83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
第127番	第126番	第125番	第124番	第123番 番属	第123番	第122番	第121番	第120番	第116番			第114番	第113番	第112番	第111番	第107番	第106番	第105番	第104番	第103番	第102番	第101番	第100番	第98番
三本木	九戸、閉伊郡	沼宮内宿	秋田、山本郡一能代郡	太平山の位置	秋田郡、山本郡	花館	花巻	津軽町	最上郡			越後岩船郡、出羽田川郡	牡鹿	松島	蔵王山	岩城郡、磐前郡	白川、那須	宇多郡、行方郡	安達郡、伊達郡	伊達郡、刈田郡	磐梯山	飯豊山	蒲原	刈羽



小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図			小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図	小図
小	小	小	小	小	小	小	小	小	小			小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小



## 伊能図における経線のズレについて（1）

吉田 正人

### 一、はじめに

千葉県佐原市にある伊能忠敬記念館に入館すると、最初に出てくるのが衛星写真による現代の地図と伊能図を重ね合わせ、「伊能図のズレ」を説明した展示である。展示作成者の意図としては、おそらく伊能図が現代の地図と比べても遜色のないものであることを示そうとしたのであろうが、これを説明するボランティアの方々は、最初から「伊能図のズレ」という難しい問題にぶつかり、これを如何に説明したらよいやら頭を悩ませていると聞いた。

「伊能図のズレ」の問題を最初に指摘したのは、大谷亮吉（一九一七）であり、その後、保柳・廣瀬（一九七四）が大谷の厳しい批評に反論している。展示に使われている図（図1）は、この際に保柳が使用したもののだが、その後は保柳の意図に反して一人歩きし、むしろ「伊能図のズレ」を強調するために使われてきた。

また一九九八年に里帰りし江戸東京博物館に展示された英国海軍水路部の伊能図を仔細に検討すると、英国海軍は「日本朝鮮近傍沿海図（一八六三）」をメルカトル図法で編纂するにあたり、最初に伊能図の経線を忠実に写し取ろうとしたが、途中でズレているのは海岸線ではなく経線であることに気づき、海岸線をそのままに生かして経線を修正していることを発見した（写真1）。百年以上前の英国人が「伊能図の経線のズレ」の問題を解決しているのに、現代の日本人が伊能忠敬記念館の展示を見て「伊能図の海岸線がズレている」という誤解を持ったまま帰るのはたいへん残念だと感じ、「伊能図の経線のズレ」に

写真1 英国グリニッジ国立海事博物館にあった伊能図

伊能図の経緯度線をもとにメルカトル図法に変換しようとした鉛筆の跡が残っている。しかし実際には伊能図の海岸線を生かしたメルカトル図が作成された。



関し、伊能図の研究の歴史を遡って検証するとともに、伊能忠敬はこれをどう解決しようとしていたかを推測し、伊能が作りたかった日本地図を再現してみたいと考えた。

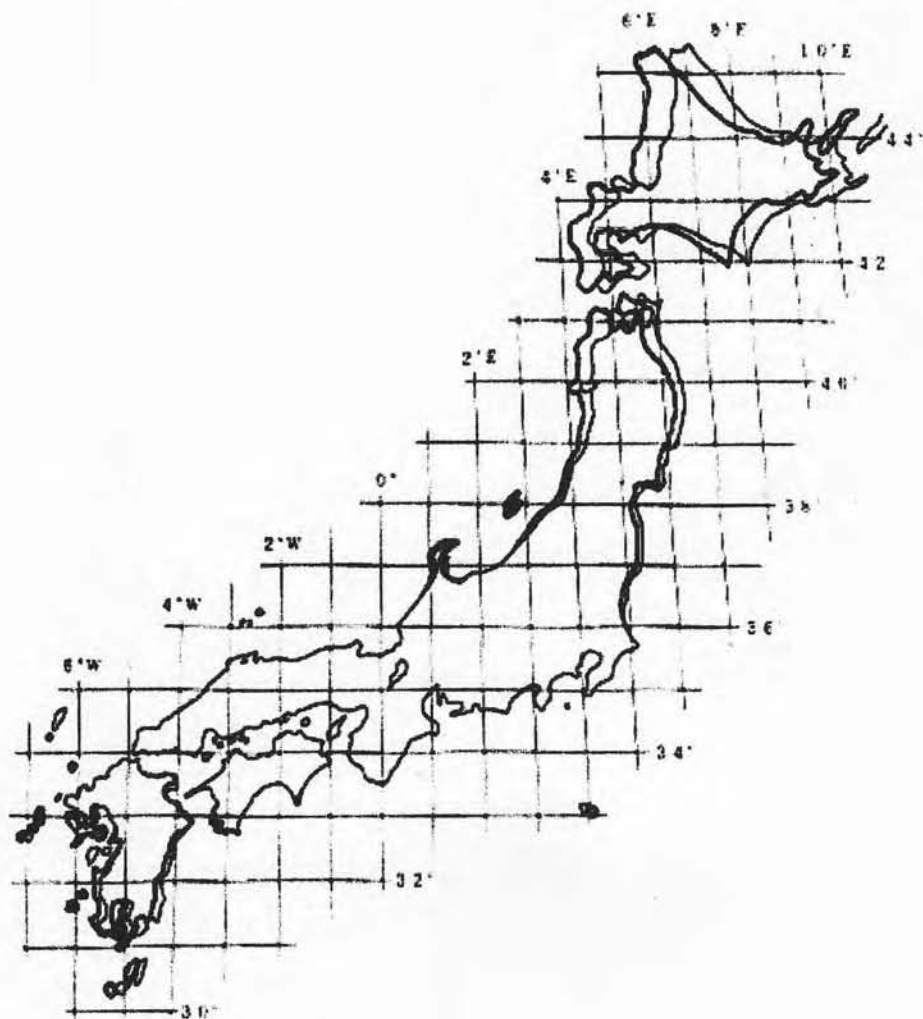


図1 保柳が「伊能図のズレ」を説明するために示した図

(「伊能図に学ぶ」東京地学協会 1998 より引用)

伊能図の海岸線(細線)は、現代図の海岸線(太線)に比べ、東北、九州で東にズレているという説明に使われてきた。

## 二、経線のズレに関するこれまでの研究

### (1) 大谷亮吉による批判

大谷亮吉は「伊能忠敬(一九一七)」の中で「文政四年に大成せる奥地全図には描画上非常なる過失ありて東北及西南地方の経度に大誤謬あるにも係らず当事者の注意を喚起するに至らずして漫然観過せらるたるは畢竟かかる大誤謬を直接に指摘するに足るべき有力なる天体的経度算定の結果の存せざりしことを告ぐるものにして又以て経度測定の失敗に終わりとる一証となすべし」と、文政四年に完成した大日本沿海奥地地図における東北・九州の東西方向のズレを指摘し、「大失態・大混乱」と言葉極めて批判している。

大谷はその原因の第一を、経度測定の失敗に帰している。具体的には、伊能測量隊の測量期間に起った日食四回、月食九回のうち「信ずべき経度を算定し得たるは多くも一、二回を越えず。更に測地誤差補正用として其効力を發揮せしものに至りては遂に全くこれあらざりしに似たり」。また木星の衛星食の観測一五回のうち「江戸歴局にて同時観測を施行し得たるもの……多くも五、六カ所以上に出でざるに至るべし。……忠敬が非常なる努力の結果として木星衛星の観測材料より算出したる経度は遂に地図の総括に資せんとする当初の目的を毫も満足する能はずして全く無効の労役に終わりとること殆ど疑いを容れず」と厳しい評価をしている。

大谷はその第二の原因を、地方図を総合して総合図を作成する際の接合方法に帰している。文政四年の大日本沿海奥地図は、近畿中国図を中心にして、東に東日本図、伊豆諸島図、蝦夷図を、西に四国図、九州図を接合したものである。しかし、京都を中度とする近畿地方図に対して、江戸を中度とする文化元年の東日本図を接合するにあたり、

新たな経線に基づいて海岸線を改描する必要があるにもかかわらず、「何等の変更を加ふる所無くもとの俣にてこれを奥地全図上に転写せり。総合の方法斯の如く粗雑と云わんよりは寧ろ乱暴を極めたるが故に……若狭国境より東北に進むに従い誤差の値は漸次増大し能登、越後辺の海辺に於ては既に四、五分乃至六、七分に及び東海岸及び奥羽地方に在りては誤差は緯度の関数として北に進むに従い増加し、三蔵、野辺地に於いては其値実に二十分内外に達したり」として、「姑息なる方法」という表現を用いて厳しく批判している。

さらに大谷は第三の原因として、地図投影法の知識の不十分さを挙げています。「忠敬はこの図(東日本沿海地図)を製するに当りてもサンソン(以下サンソンはママ・フラムステッド式によりて経緯線を描画し江戸黒江町を通過せる経線を以て初子午線となし緯線に直交せる直線を以てこれを表示せり……一方に於てはサンソン・フラムステッド式によりて経緯線を描せるにも係らず他方に於てはこれと両立せざる相似關係を成るべく図上に保有せしめんと欲したる為め描写上混乱を来したるものなり、忠敬の没後文政四年に完成せる本図(大日本沿海奥地図)は……サンソン・フラムステッド式により京都西三條台改曆所跡を通過せる経線を以て初子午線となしこれを緯線に直交せしめたるを以て図幅の東西両辺の付近に於ては経線は緯線に対し傾斜すること甚しく極端なる場合には九十度より違ふこと実に七度許に達したり」と述べています。

大谷はさらに享和三年に高橋至時が間重富に与えた書簡を引用し、「高橋至時は忠敬が測量業務を開始せる後幾ならずして早くもこの欠点に留意する所あり、経緯線描法即ち地図投影法の改良に意を潜め遂に一案を得て更に大に研鑽を加え以て忠敬が測量の一段落を告ぐるを待ち新方式により地上に於ける実際の形勢に最も適應せる地図を作製

せしめんと企てたり」と高橋至時が円錐図法に似た新投影法を企画しながら文化元年至時の病没のため、同年八月に上梓した東日本図がサンソン・フラムステッド式を採用したことを忠敬の責任に帰している。一方で忠敬自身もこれに満足せず、更に適切な投影法を求めて文化二年以後に、「一里六分図東西之経度並北極下国直円経差」と題する計算表を著し実用準備にかかったにもかかわらず、忠敬の死後、文政四年に完成した大日本沿海輿地図において旧法を適用し誤謬を生じせしめた責任を至時の子の高橋景保に帰している。

第四章「測量の精度」の第六項「地図の精度」では、二十数頁にわたって地方図と総合図の諸地点の経度を、最近測定した経度と比較しその差を示している。この際、本州東半分については江戸を基準とする子午線をもとに、また九州については小倉を基準とする子午線をもとに、諸地点の経度を割り出せば、最近測定した経度との差が小さくなることを示し、茲に試みたる経線改描の如きは忠敬が総合図を製するに当たりて犯したる大過誤に対する概括的訂正たるに過ぎず、更に描画方法の厳密ならざりしがために誘入せる描画誤差を局部毎に逐一明にするを得てこれに対する補訂を施さば一層各地点経度の誤差を縮小し得べきや疑いを容れず」と自信のほどを示している。

## (2) 保柳睦美による反論

保柳睦美は、伊能忠敬没後一五〇年を記念して刊行された「伊能忠敬の科学的業績（一九七四）」の中で、「大谷氏がなぜこのようににはげしく非難するのか、私にはどうも解せない。むしろ根本は、大谷氏自身が、忠敬当時の日本の学者の地図（特に経緯線の描き方）に関する科学的知識の水準を独断で決めてかかり、実は全く理解していなかったことによる。……極端に言えば経線は全国的には記入する必要がな

かったくらいのものである」と大谷に反論している。「伊能忠敬」については、「彼が四二歳の時の著作であるから、その若さと、彼の専門の立場から、経度の狂いは許せなかったのである」とある程度の理解を示しているが、外国人に紹介するため、英文で著した「Tadatsaka Ino(1932)」については、「一片の伊能図も示すことなく、しかもその精度において、経度の狂いを依然として強調していることは、全く了解に苦しむ……地図作製当時の要求や、当時の地図編集に対する日本の科学界の知識の程度を十分に考慮せずに、地図に対する現代の精度の要求を基盤として臨む点において、大谷氏の態度にこそ大失態を認めないわけには行かない」と酷評している。

保柳氏の反論の第一は、サンソン・フラムステッド図法を採用したというのは誤りであり、経線はあとから計算によって記入されたものであるということである。すなわち「忠敬の測量材料は緯度一度の距離と主要地点の緯度および測線に沿う地点間の方位と距離は測定済み、しかし経度は不明」と、忠敬の考え方による経緯線記入方法として最も自然に落ち着くものはこの種のものになってくるのである。

保柳は経度の誤差の諸原因として、第一に日本の諸地点の正しい経度がわかっていなかったことを挙げ、この証左として、仮に伊能図の経線が正しいと仮定して、現代の同縮尺の日本地図を重ねてみると、伊能図は北海道から東北地方、および九州地方では東にズレるが、北緯三五度周辺ではほとんどズレが見られないことから、「この地帯では伊能図の経度もかなり正確なものであって、決して『無意味なもの』ではない。……東海道・山陽道・北九州へかけての主要都市の経度決定は、当時の暦学上からも望まれていたものであること……伊能図は、だいたいその要求を満たしているものであることを示す」と評価している。



誤差の第二の原因として、当時の磁針の偏角の分布が、現在と違っていたことを検討している。これは地質学者のナウマンが一八八七年に発表した興味深い説であり、「忠敬の測量時代には、江戸付近を中央にして、偏角がほとんど〇度に近かった。しかし忠敬の時代に南北十五度にわたる地帯が、どこも偏角〇度であったとは考えられない：當時は日本列島をやや東西に横断して〇度の地帯があり、その北部は西偏、南部は東偏の傾向があつたのではないか」というものである。ただ「偏角だけを原因とすれば、こんなにひどい海岸線のズレがおこるためには、たとえば東北地方で、すでに一〇度近くも西偏していたことになる。これは全く考えられことであるから、他にも原因がなければならぬ」と説明している。

第三の原因として、保柳自身の実験、すなわち、『大胆にも試みに北緯三五度において、各経度ごとに垂線を描いてみる。その結果・・東北地方から北海道へかけては、文化元年上程図の経線に似たものになる』という実験に基づいて誤差の原因を推測している（図2）。

そして、「大日本沿海実測全図の編集に際して、京都西三条台改曆所跡を〇度（中度）の経線としながら、東日本については文化元年の陸地配置の図をそのまま使用した。しかもこの図は、江戸を通る経線を〇度としたものであるから、京都を通る経線を〇度として正しく描き直した図に比べると、東北地方から北海道へかけては、もともとその位置が東へ寄っているものなのである」、「伊能図の大日本沿海実測全図における陸地配置の編集には、各地方図がそのままに東西に継げられるというような、現代の知識からみれば理論に合わない部分があつたことは否定できない。・・このような図を基盤として、この上へ、京都を通る経線を中度とした諸経線を、独自の計算によって記入してし

まったから、その北東部や南西部では誤差が大きく現われ、ことに北海道ではこれが最もひどくなつたものであらう。そしてこれが伊能図における経度のズレに、最も大きな影響を与えた原因と思われるのである」と結論している。

なお保柳が、第一の原因を説明するために示した図（図1）は、北緯三五度付近ではズレがないことを説明しようとした保柳の意図とは異なり、その後、伊能図のズレを説明するために繰り返して引用されるようになる。佐原の伊能忠敬記念館の展示もこれをもとにしている。この妥当性については、後に再検討することとしたい。

### （3）廣瀬秀雄による反論

廣瀬秀雄は、「伊能忠敬の科学的業績（一九七四）」中で、忠敬は江戸に出たときにすでに全国測量の計画を持っていたという持論を展開した後で、大谷の伊能図の精度に関する主張に言及している。

まず廣瀬は、「従来の伊能図の研究者は伊能図に経緯度線があるという事実によって、投影という言葉易々と使用しているが、それについては一考が必要である」として、「大谷氏はその議論の過程で、伊能図が、：経度については理論的な投影思想による議論ができていない要素を含むものであることを指摘されながら、最後まで経線に執着され、場合によっては経線の改描ということまで実行して、伊能図をあくまで経緯線であらえろという態度をとっておられる。・・地図の精度はあくまで地図自身に語らせる方法をとるべきで、任意性をふくめる恐れのある経緯線改描というような方法は一考を要する。・・と大谷の分析を批判している。

廣瀬は忠敬の測量及び経緯線記入の手順を細かに説明した後で、「忠敬が描いた経緯線ネットは、東洋流の北極出地と方格図という思

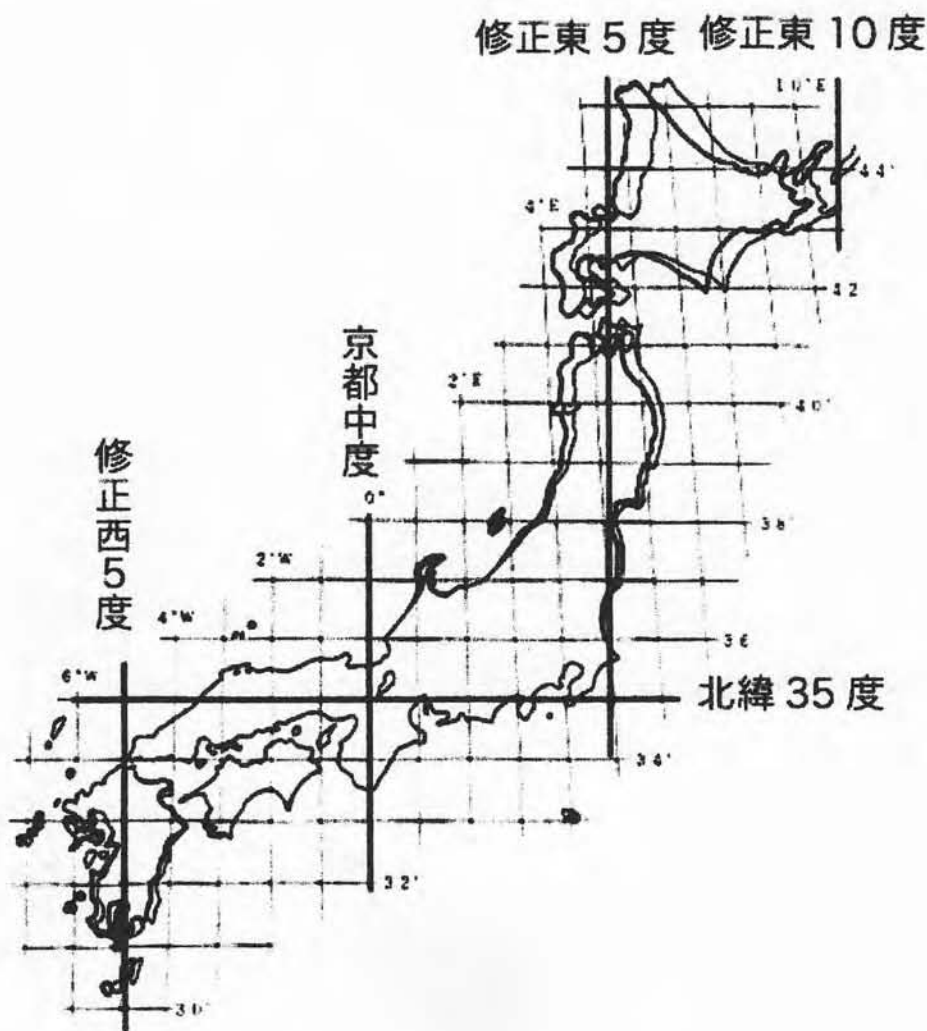


図2 東日本の地図が正確であることを示す保柳による実験的な試み  
北緯 35 度線に垂直な経線を引いてみると東 5 度線は渡島半島、東 10 度線  
は根室半島を横切り、文化元年東日本図と一致し、現代図とも矛盾しない。

想図に、無理に西洋流の経線を書き込もうとすると、必然的に生じるネットであり、投影の概念がまだ成立していない以上、このネット描法の源流を、投影にもとづく西洋流のものに求める必要はなく、自然発生的に描かれたものとわたしは考えるのである」と述べ、これを理解せずに伊能図の経線のズレを強調する大谷を、「伊能図に勝手な経線を記入し、その経緯線に従って読みとった任意地点の経度値というものを近測経度値と比較することは経線記入の誤差を論じることにはなっても、伊能図の経度方向の持つ意義、または地図の持つ対測量起点経度差の精度を論じることにはならないであろう。

いわんや中央子午線を任意に設定し、経線を改描した結果について、経度の読みとり値と近測地とを比較しても、それは改描経線によると、経度の読みとり値と近測地との差はこれほどになるというに留まつて、地図の精度とは程遠い議論のように思われる」と反論している。

さらに廣瀬は、伊能図の原資料ともいえる「文化五年四国及大和地測量、文化七年九州之一部東西南北距離記」、「諸国測量地図北極高度并東西度」をもとに、四国および九州の各地点の経度を忠敬がどのようになし算出していたかを求め、現代の国土地理院発行の二十万分の一の地勢図との差を検定し、「これらの現象は、いずれも、伊能図は単に東西分・南北分によつて描かれ、寄せ集められたということを証拠立てているのである。従つて経緯線の記入されている地図は投影にもとづいて描かれているはずとの信念により、SF（サンソン・フラムスチード）ネットによる見かけの経度値にもとづいて伊能図の研究方法は全く過つたものであると考えられる」と論じている。

#### （4）羽田野正隆による評価

羽田野正隆は、「伊能図に学ぶ（一九九八）」の第九章「伊能図の評

価と今後の課題」の第二項「なぜサンソン・フラムスチード図法が使われたか」において、大谷と廣瀬の両論を紹介している。

羽田野自身、東大総合研究博物館所蔵の伊能中図をもとに、北緯三〇（四五度）の北緯一度毎に、経度一〇度の平均値を読み取るとともに、正弦曲線による期待値を示して、伊能図に「サンソン・フラムスチード図法が使われたことがわかる」としている。ただし羽田野は、大谷とは違い、地図の投影法として最初からサンソン・フラムスチード図法が用いられたと言っているわけではない。

羽田野は、経線記入の経緯を、「それらの地図（平面図の集合体である日本地図）に経緯線網をかけること自体無理なのだが、緯線は平行線としてなら正しく記入することができる。実際、緯線の中図も残されているが、観るものに完成された地図の印象を与えない。そこで経線も描かざるをえなくなるのだが、忠敬はこれを次のように処理した。まず各緯線上に緯線間隔に相当する経度弧長を算出し、それらの値を京都を通る経線を中心（中度）として東西にプロットし、最後に対応する点を結んで経線とした。このような網目はサンソン・フラムスチード図法と呼ばれているが、同図法を採用したことにより、中央経線から離れるにつれ、実際の経度とのずれがめだつことになつた」と説明している。つまり、地図は平面図の集合体であり、経線はサンソン・フラムスチード図法によるものという、保柳・廣瀬の説に近い。

一方では、「廣瀬氏の所論は測量の方法が図法の性格を規定したとみるのであり、おおむね筆者の上記説明に近い。しかし大谷氏の考察が間違っているかという点、一概にそうともいいきれない面もある。というのは、図法は球面を平面に展開するための手段であり、むしろ誤差の少ないものを選ぶ方が望ましいわけである。その観点に立つと、

大谷説になるし、別に地図内容と経線が一致していなくとも構わないという観点に立てば、廣瀬説になるからである。」と大谷、廣瀬の違いを観点の違いとして説明し、「そもそも忠敬の測量では経度を測ることができなかったし、彼の周囲には球面幾何学を自在に扱える職能集団もいなかった。そのような技術環境のもとでは、投影法のみきりはなして、その適否を論じてあまり意味がない。伊能日本図における経線はいわば装飾ぐらゐに考えておいた方がよいように思われる」と結んでいる。

#### (5) これまでの論争をまとめると

伊能図の経線のズレに関するこれまでの論争をまとめると、伊能図（文政四年図）に描かれている経線が、現代図に描かれている経線とズレていることは誰もが認めている。

また、その原因の一つが、伊能らが天測により正確な緯度を測定したにもかかわらず、経度の測定には成功せず、経線のズレを修正するだけの科学的な根拠を持ち合わせていなかったことも誰もが認めるところである。さらに、伊能図（文政四年図）が、平面図である地方図を東西に接合したものであり、地図投影法にもとづく修正を行っていないために経線のズレが生じていることは、大谷・保柳・羽田野ともに認めている。

大きく意見が異なる点は、「伊能図がサンソン・フラムスチード図法を採用した」かどうかである。

大谷は「忠敬が其製作せる地図に採用せる経緯線の描画法は外国より伝来せる形式を模倣せしものなるや否や明ならず。又忠敬がこの形式を採用するに至りたる経路を明記せるものを見ず」とその根拠を示さずに、「忠敬は爾後晩年に至るまで其製作せる地方図に対し終始一貫

してサンソン・フラムステッド式を採用せるも」とサンソン・フラムスチード図法の採用を前提として議論をすすめている。また、高橋至時に対しても「当時所謂正写影法は既に崇禎曆書等に記述せられ、又円錐投影法若しくはこれに類似せる方法によりて地球面の一部局を描出したるものも至時の見聞に達せざりしにあらざるべし」、その子の景保に対しても、「文化年間に著したる地図につきて見るも万国全図には正写影法を使用し日本辺界略図には円錐図法を採用するに謬らす。以て投影法に関する知識決して貧弱にあらざりしを察するに足るべし」と、当時から投影法の知識があつたはずだという前提のもとに議論をすすめている。

これに対して保柳・廣瀬は、「伊能図がサンソン・フラムスチード図法を採用したというのは誤りであり、経線はあとから計算によつて記入されたものである」と主張している。羽田野はサンソン・フラムスチードにもとづいた経線が引かれていることから、「サンソン・フラムスチード法を採用した」という表現を用いているが、経線はあとから記入されたことは認めている。

伊能図は、地上の測線の測量を導線法によつて正確に実施し、富士山等の目印を用いた遠方交会法、天測による緯度の測定によつてそれを修正したものである、経度は天測によつて測定することができず、測地点間の距離の東西分をその緯度の経度一度あたりの距離で除すことで推定している。

経線はこの数値とはかわりなく、地球を球面と仮定して各緯度における経度一度の距離を計算し、京都を中度として、この距離を隔てた経線を引く。すると緯線は平行の直線、経線は北極に向かって収束する直線からなる経緯線ネットができあがる。この地図作成手順は、大谷・保柳・廣瀬・羽田野ともに認めているところである。

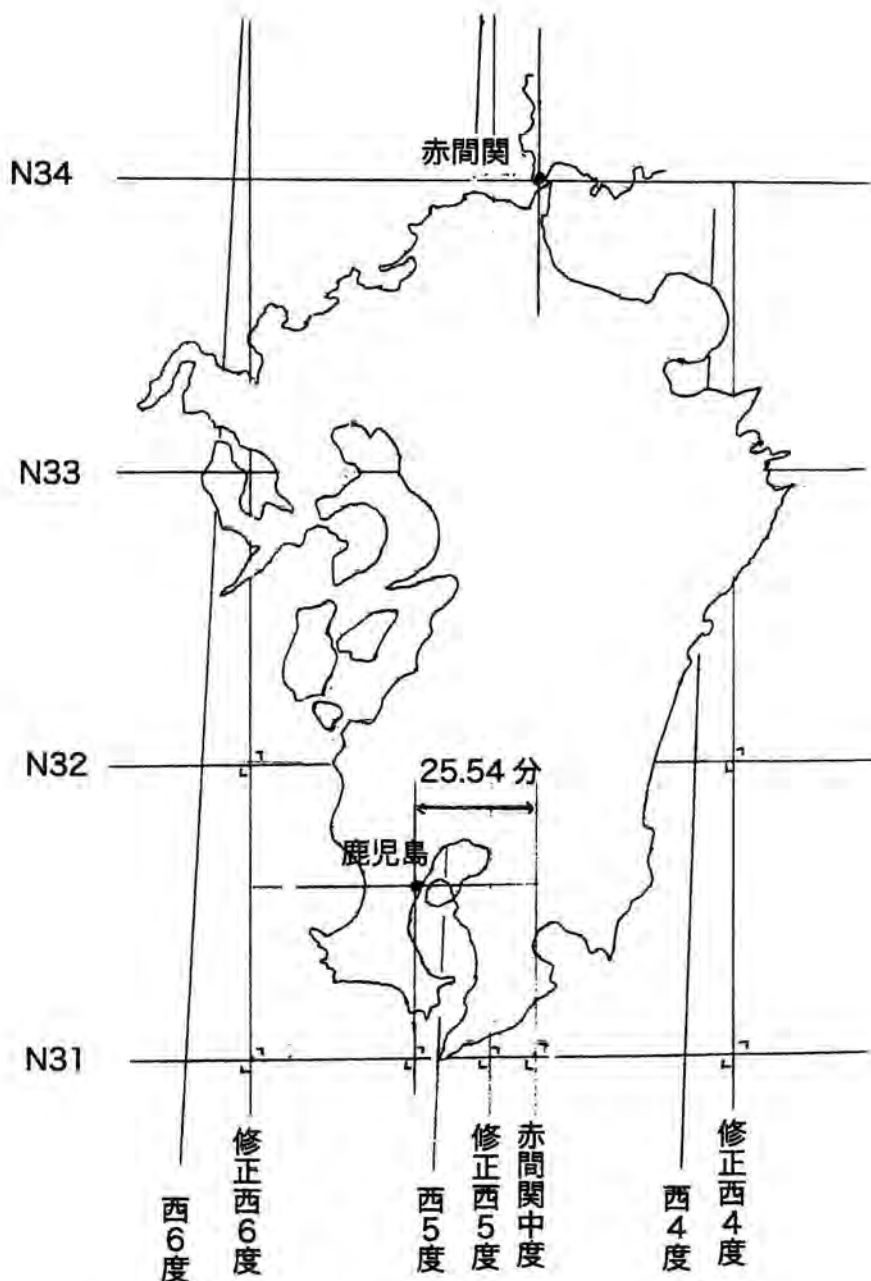


図3 九州の地図がほぼ正確であることを示す廣瀬・保柳の実験的試み

廣瀬（1974）は伊能測量の元データである「文化七年九州之一部東西南北距離記」を基に赤間関と鹿児島島の経度差が0度25.54分であることを計算した。保柳（1974）が実験したように北緯35度線から垂直に修正経線を引き直し、それを基準に赤間関と鹿児島島の経度差を求めると約25分（現代図によれば22分）となり、ほぼ廣瀬の計算通りであることがわかる。



このような経線を引くことによって、経線が斜行する地域では、地図上の方位盤の南北と経線の南北が異なるという事態になることや、東日本図（文化元年図）と日本全図（文政四年図）の経線の方位が異なるというような基本的な問題に、忠敬らが気づかなかったはずはない。にもかかわらず、このような経線が引かれたのは、当時の科学技術では、地図投影法をもとに地図を作成する技術がなかったからであると考えられる。忠敬の考えでは、あくまで地図の基本は、地上の測量及び緯度の天測にもとづいた海岸線であり、地図投影法によって海岸線を変形するという考えはなかったであろう。

保柳は、「伊能図がサンソン・フラムスチード図法を採用した」というのは誤りであり、経線はあとから計算によって記入されたものである」と断定しながら、彼が示した図は「伊能図の海岸線はズレている」という誤解のもとを残した。保柳の説をとるならば、伊能図と、メルカトル法による現代図を重ね合わせた図を提示すべきであった。そうすれば、ズレているのは海岸線ではなく経線のほうである、ということが分かったはずである。保柳は大谷批判の最先鋒であるが、論文中でも「海岸線のズレ」と「経線のズレ」を混用するなど用語上の矛盾があったり、誤解を招きやすい図が大谷の誤りを補強するために使われたことは、残念なことである。

保柳を補っているのが、廣瀬の論文である。廣瀬は伊能図の原資料ともいえる「文化五年四国及大和地測量、文化七年九州之一部東西南北距離記」、「諸国測量地図北極高度并東西度」をもとに、四国および九州の各地点の経度を忠敬がどのように算出していたかを求め、現代の国土地理院発行の二十万分の一地勢図との差を検定している。

すなわち忠敬は、四国に於ては岡崎村（徳島県鳴門市）、九州に於ては赤間関（山口県下関市）を基準として、四国・九州の各地点と基

準点との、東西・南北の距離の差、経度の差を示している。これによれば、赤間関と鹿児島間の経度差は、二五・五四分となり、大谷が伊能図（文政四年図）から読み取った一八分とは違ってくる。（図3）

ちなみに現代の地図による下関と鹿児島間の経度差は約二二分であるから、「九州南部の測地点の経度は、現代の地図より東にズレている」という大谷の指摘とは反対に、伊能図の九州南部は現代の地図より西にズレることになる。

伊能図は地図投影法については全く考慮せずに作成された平面図の上に、地球が球面であるという知識（当時すでに地球の断面は楕円であることが知られていた）にもとづいた経線を引いたものであり、サンソン・フラムスチード図法を採用したとはいえない。

伊能図の経線が、地図投影法を承知した上で引かれたものでない以上、文政四年図上の各地の経度が、現代の地図上の各地の経度と比較してどれだけズレているかを論ずるのは意味のないことである。

もし伊能図と現代図を比較するならば、廣瀬のいうように「地図に語らせる」、すなわち伊能図から経線をとりのぞいた状態の図と現代図の比較、あるいは諸国測量地点の推定経度と現在の経度の比較を行うべきである。

次号は、以上のような視点で、伊能図と関連した地図を重ね合わせ比較し、どのようにしたら伊能図を現代の地図投影法を使って蘇らせることができるかを考えてみたい。

（つづく）

（よしだ まさひと・日本自然保護協会常務理事）

## 地域史料

### 篠山領追入本陣の事前準備

― 篠山市大山・園田家文書 ―

横川 淳一郎

はじめに

忠敬が篠山（ささやま）領にやって来たのは、九州第一次測量の帰路で、文化八年（一八一―）三月四日姫路を出立、三月八日篠山領今田の木津から釜屋へ測りに来た。

その後、九州第二次測量では、文化十一年（一八一四）の正月を姫路で迎え、但馬から丹波氷上郡を通り、大山（二月三日）から福住（十二日）まで（途中二日間は摂津へ）を測った。

篠山領は現在の篠山市で兵庫県中央部の東端にあり、江戸時代は多紀郡の殆んどが篠山藩領であった。

当時の藩主は青山下野守忠裕（ただやす）。五万石の譜代大名で、忠敬が測量に来た時は老中職として江戸に詰めていた。

（忠裕は三十一年間老中を勤め、終りには功により一万石を加増され六万石となっている）

大山の大庄屋園田家は篠山領の北西にあり、氷上郡と境を接し、測量方が最初に足を踏み入れた街道筋にある。

平成五年大山の園田家文書が関西大学に寄贈され、その中に丹波測量に係する文書が十一冊発見された。そして、『関西大学博物館紀要』の創刊号・第三号・第五号に、測量関係の文書が全部翻刻され発表さ

れた。

『測量方御休泊用・御案内手続覚書』

『測量御用控書』

『測量御用手控帳』

以上三冊が準備をした記録で、その中の一冊『測量方御休泊用・御案内手続覚書』を紹介したい。

この文書は篠山へ二回測量に来た内の二回目、文化十一年の記録である。



測量方御休泊用・御案内手続覚書  
(表紙) タテ三四・五 ヨコ一二・五センチ

壺  
測量方

御休泊用并御案内手続覚書

覚

一 此度測量御役人、当郡御通行・御  
休伯割、左之通

二月三日

柏原△御越

御泊り 追入村

三日御着早ク候ハ、御中食用意

四日

御昼中食 味間新村

同日

御泊り 大山北野村

(五日〜十一日間略)

右之通ニ御座候

御名前左之通

御本陣

一 伊能様 壺卜間

此御次の間御荷可置  
一 久保木様  
一 笠原様 壺卜間

一 尾形様 壺卜間

但シ久保木様・尾形様

間取六丁(畳)敷

一 御家来衆 壺卜間

△五ツ間

一 別御本陣

一 今泉様 壺卜間

一 門谷様

此次荷物一ト間

一 御家来衆 一ト間

一 荷物置 一ト間

右、御泊り御本陣并ニ別御本陣共、

麻上下ニ而村境へ出迎、翌朝村境へ

御見送之事

手札認方左之通

御本陣何村

誰

別御本陣何村

誰

右奉書紙ニ相認メ、御出迎之節可差  
上事

但御前宿へ罷出候ニ不及候

一 御中食之亭主ハ、羽織袴ニ而村境へ  
出迎、御立之節、村境へ御見送り之事

此手札認メ方

御休足所何村

誰

右、奉書坎上杉原之内ニ而相認メ、

出迎之節可差上之事

一 御料理向一汁一菜ニ候得共、魚類・野菜物・塩噌・箸・楊枝等、  
料理人四人引受罷越候間、村々ニ而用意ニ不及候

一 上白米

一 酒

一 油・らうそく

一 草履・草鞋等

一 右、其所々ニ而御用意可成候、尤昼ハ酒用意ニ不及候

一 御幕 五張

一 御高桃灯 八張

一 但し竹共

一 塗三方 三ツ

一 熨斗 三抱

一 風呂桶 四ツ

但しふたとも

一 惣輪膳碗 十五人前

一 手たらい 五ツ

一 釣台 貳ツ

但し棒共

一 桐油（とうゆ） 貳

一 机 五ツ

一 右之品、御泊り之村より前御宿江受取ニ可被遣候

則、右之釣台ニのせ候共貳指（棹カ）、風呂桶貳荷、人足六人  
之積りニ候

一 蠟燭老泊り、貳拾四挺宛相渡し可申候間、是ハ河合宅へ受取ニ  
可被遣候

但し高張老挺ニらうそく五挺宛、星測老挺ニ同老挺ツ、

（略三行）

一 木地三方 三ツ

一 刀掛ケ 八ツ

一 毛氈 三枚

一 右三品ハ、御泊り・御昼休之御入用之品ニ付、前御宿より老日  
之通し人足ヲ以、早朝御昼休所へ持参いたし、御入用相済候上、  
其人足ニ而御泊りへ持参候様、前御泊りより御取斗可成候

一 傘 拾三本

一 下駄 拾三足

一 右者、御途中御入用難斗ニ付、通し人足ヲ以、御供申付候事  
郡御奉行様上下五人

一 右、御泊り有之候処へ御出張、御止宿被遊候、此御料理向も、  
料理人一緒ニ引請候事

但し御泊りの場所斗二而、御昼休之處へ者御出不被成候間、御中食用意二不及、御泊り之處二而 三飯差上可申者、刻限遅速より、時宜之御取斗可被成候

御先払兩人、右者御泊り・御昼共、其所々二而用意可有之、尤料理人一緒ニ引請、罷在候事

御用掛り三、四人 右同断

給仕人拾式人程御用意可然、尤女無用、男子袴二而相勤可申事御宿手伝へ人足并ニ掃除共、御一泊二十式、三人位之御用意二而可然哉、尤時宜之御取斗可被成候事

御菓子差上候二不及旨、被 仰出候得共、少々料理人方二用意罷在候間、村々ニ而菓子用意二不及、尤御泊り之村ハ、菓子盆五ツ六ツ御用意可成置可然候

八ツ時頃ニハ御本陣へ到着御座可有間、其節御昼御膳差上、又口（虫損）御飯御夜喰相兼、暮頃御膳差上可申、此時御沙汰候ハ、用意之御酒差上候事

御膳之上、亭主罷出候上二、御料理之儀、御触通りニ相隨ひ候様、地頭役所ニ而被申達候二付、龜末之御膳差上候段、御断口上可申上旨、被 仰渡候

御昼用意之儀者二里半迄之所中食二不及、三里ニも、およひ候ハ、中食可被成之旨、被 仰聞候二付、用意之事ニ候万事取斗ひハ叮嚀ニ可仕旨、御役所ハ被 仰渡候間、此段御承知可被成候

御払米代白七拾匁替位

本賃御口給有之候ハ、是迄之御例ニ可被成旨、可申上事測量御役人様、上下拾三、四人之由ニ候

御夜具、御三人様方御持参之由、先達而申触候得共、此度篤与

承り合候處、伊野（ママ）様斗御夜具御持参ニ候 其余者御夜具御用意可被成候

伊能様御火燵者、紬之ふとん、其余者木綿風（布）団ニて宣候

御たはこ盆之きせる、持来候ヲ能清メ、差出シ候様被 仰出候

燭台ハ不用、あんとう（ママ）ニ而宣敷候

御泊り御本陣ニ、東西拾坪斗、南北見晴場所用意之事

御通行案内之事

翌日御通行筋之村々庄屋中、羽織袴二而、未刻頃御前宿へ罷出、御機嫌伺、帳面差上可申候

但し大庄屋ハ罷出ルニ不及

追入村庄屋

同村問屋

右、柏原御宿へ罷出、御機嫌伺、帳面差上可申事大庄屋組境江罷出、手札差上、組境迄御供可仕事但し着用、羽織袴

手札認メ方

何組大庄屋

誰

右奉書ニ可相認事

庄屋村境江罷出、手札差上、又村境迄御案内可申事

但し 着用も（股）引わりんす

手札認方

何村庄屋

誰

右、上杉原紙ニ而可認メ

御通行先、箒持御出し可被成候





内

五拾老人 古佐組

内式拾老人 梵伝持

右同断

四十人 坂井組

四十人 大沢組

(六日、十二日分略)

右之通 人足刻限無遅怠、御出し可被成候

御本陣之隣村ニ而人足拾人ツ、不時用意之手当、置可被下候

人足式拾人ニ、引纏庄屋老人ツ、差添、其所々江相揃、御用掛

り罷越居候間、相届ケ候様、御申含可被遣候

人足之者、立杖持参候様、御申付可被成候

引纏庄屋并人足

茶所左之通

追入村 利左衛門

太田新田 杉右衛門

(七ヶ所略)

右之通、御承知可被下候

尤、刻付被成、早々組繼ヲ以領達、

留り組、河合宅へ御返却可被成候

以上

二月朔日 御用掛り

追而申上候、先達而人足割触置候处、御休泊間達ニ付、今日改而割触仕候間、此帳面之通、人足御出し可被下候

用意人足

——この間破損——

三日昼から

一 笹山へ届 又右衛門

御触書并追入村

宿賃之儀窺

同日

一 供老人 上村

勘七

(注) 横帳の末尾が破損しているため、文書のつながらないところがある。破損部は何行にもわたる破損である。

篠山の方から、「柏原藩などは忠敬が泊っている本陣へ、藩士が若党・槍持・草履取りを従え挨拶に出向いているが、笹山藩は『当所町奉行浦上半十郎、町方に控居口上の届』と『測量日記』にあるように、粗末な扱いをしているのではないか」という意見があった。

しかし、この「御案内手続覚書(手順覚書)」のように、細かいところまで気を配り、落度のないよう手はずを調えた様子がよく分かる。

- 一 手札の書き方、挨拶に出むく服装
  - 一 食事の時、本陣亭主の挨拶の仕方
  - 一 不浄所はまくでも覆うこと
  - 一 梵天持は才覚なる者を選び立て
  - 一 本陣の隣村に人足十人ずつ、不時用意の手当として置くこと
  - 一 人足式拾人に引まとい、庄屋老人ずつ差し添えること
- 等々、気配りに万全を期している。

以上のような計画を大庄屋に指図したのは御用掛りである。

『関西大学博物館紀要』の第五号の末尾に、木村修二氏が次のように書いている。

御用掛とは、正式には測量方御用掛とよばれ、篠山藩が伊能隊（測量方・天文方）を迎えるにあたって創設した臨時の部署のようである。任命の経過は不明だが、領内の大庄屋・庄屋の中から適当な人物を選んだらしい。

とあり、園田家文書や『測量日記』から拾上げると、次の人物である。

大庄屋	明山権太夫
野々垣村大庄屋	樋口庄左衛門
宮田村庄屋	九右衛門
町庄屋	兵左衛門
〃	五右衛門
東岡屋庄屋	磯八

これらの人達の相談だけではなく、篠山藩の指示を沢山受けたものと思われる。

あとがき

これまで青山下野守忠裕は老中職にありながら、測量に全然関係がなかったと思っていたが、『伊能忠敬研究』第二四号の二十頁で次の記事が明らかになっている。

（九）測量に関する触書（文化十二年）小森正和家文書

申渡書

（前略）

一 廻国先ヨリ江戸頒曆所江御用状差出候儀も有之候ハ御用便ヲ以可相届、江戸表ヨリ廻国先江御用状差出候節心當之場所可相達候間、其所江到着以前候ハバ着之上相届、出立後二候ハバ先々相届候様可致、右之趣土大炊頭殿・青山下野守殿被仰渡候間申達候

（後略）

篠山藩に届けられた触書は、文化八年九州第二次測量に江戸を出発する時のもので、同じ文面である。しかし青山下野守の名はなく松平伊豆守（老中首座）だけである。

園田家文書の中に今泉と笠原の名が出ているが、今泉又兵衛は別動隊、笠原三之助は福知山から江戸に帰り、篠山には来っていない。

『関西大学博物館紀要創刊号』から転載の許可を数田貫教授より頂く。

（よこがわ じゅんいちろう・郷土史家、兵庫県柏原町）

地域資料

岩城島の伊能測量文書 その二

伊藤 栄子

(編集部)

本号では、第三〇号で紹介した岩城島文書のなかに出てくる尾道町の筆役文蔵が収集した情報の全文を掲載することにした。文化二年(一八〇五)九月二十九日京都伏見から出された忠敬の先触れは、十一月一日隣の弓削島の大庄屋村井小右衛門から岩城島の庄屋友右衛門に知らされた。友右衛門はすぐ大庄屋に報告するとともに、一五日には情報収集のため、聞き合いの使者を因島に派遣した。

使者は、因島では情報が得られなかったので、尾道までいつて、赤穂で調べた情報を聞いて書き留めてきたという状況は三〇号に述べたとおりである。文書は他へ貸してあり、なかなか見せてもらえなかったが、やっと写しを取り、二月一日に帰村した。以下の文書は尾道町の文蔵が赤穂へ調べにいつて聞いてきた報告の全文である。赤穂市に所蔵する伊能測量文書と比較しても、聞き書きとしてよくまとまっているので収載した。

注記は編集部が担当した。

公儀天文測量御役人様御順国諸仕構并備前

片上、赤穂御領坂越浦為外聞罷越候間書共

丑十月

一、御上式人老間 一、御次七人老間 一、御下六人老間

ノ三間入申候

一、御上様夜具四人分御持参、残拾宅人新鋪木綿夜具

一、御酒肴は入不申候

一、御荷物之置場三間入申候

一、御本陣前より砂有之御道筋町難計

一、御本陣亭主麻上下

一、御本陣前二箱番所 但シ御域下計

一、御紋付御挑灯式張

一、御幕なし

夜具といえは布団のことであるが、四人分持参していた。忠敬、高橋善助、坂部、下河辺の四人らしい。夜具持参とは現代からは想像が付きにくいところである。残り一人分は木綿で新調、これでも豪勢である。御上は忠敬と高橋善助、御次は下役と内弟子・供侍、御下は掉取りと従者であろう。荷物だけで三部屋も必要だった。ポリウムが想像できる。城下では、宿舎前に箱番所が設けられた。盛り砂は道筋全部ではなかったらしい。

一、測量御道具御差図之所々二居(スエ)置候事

一、料理向一汁三菜 但シ給仕人六人程小遣共

一、御本陣亭主問屋前宿へ出候義無御座候

一、御菓子三ヶ所江出ス、尤菓子を凡式拾目位買調三ヶ所江分ヶ出申

候 其外音物ヶ間鋪義無御座候

一、浦々大形(ママ)陸路御廻、若陸地難相成場所ハ其所へ小船差出

候事

一、御通前町筋別而掃除之事

一、五郎兵衛縄打所ハ此度は測量無御座候由、噂有之候

一、浦辺不残式拾間計之くさり二而御打被成候由

但繩二而ハ水ニつかさ(ママ)り、延ちゞミも有之由

一、他村たりとも見へ掛り之島は凡ニ書残候事

一、絵図隣村分間ニ不及、荒方認置候事

浦々はおおむね、陸路を測るが、陸地を測り難い場所には小船を用意する。

間五郎兵衛が以前に測つた部分は測らないとの噂である。海岸を二〇間くらいの鎖でお測りになる。繩は伸び縮みするからとのことであると記す。大谷『伊能忠敬』では鉄鎖は一〇間となっているが、もっと長い二〇間くらいのものもあつたことがわかる。提出する図面には他村でも見える島はすべて書き上げるよう求められていた。ただし、他村部分の距離は書き入れないという。当然だろう。

一、書上は美濃紙堅紙二而細筆ニして相調候事

一、御宿不審番付置候事

一、勘解由様御年六十計 御歩行目附格

一、善助様 同 二十計 御小人目附格

一、島々不残御廻り、あの島へ何程と御尋之節先年より里程何程と申

参候段申上ル

一、浦辺砂先と相見候処、砂之形チ少シ渡(カ)置候事

此義は別而念入御申候、又岩組掛候処ハ其形書置絵図面ハ至而念

入候事

御宿には不寝番を置く。格式については、忠敬はお徒目付、高橋は御小人目付くらいの扱いとある。これは藩からの指導だった。砂洲は砂の形を絵図に書き入れ、岩組の場所はその形を丁寧に書くこととある。

一、院号寺号共〇口ノ内ニ書候而も、又ハ其脇ニ書候而も不苦

一、村々役人袴羽織ニて夜分御機嫌伺ニて御宿へ参ル

一、御小休なし

一、御泊風呂三本 但シ湯桶二而も

一、御膳は上下共 総輪之膳

一、御本陣ニ而拾坪計之場所入申候事 但シ夜分測量御立被成候場所

也

一、人足七人、馬六疋、長持老婢、持人足

伊能勘解由様 平山郡蔵様

高橋善助様 稲生秀蔵様

坂部貞兵衛様 門原(ママ)清左衛門様

下河辺政五郎様 小坂寛平様

此四人ハ御先触表ニ有之候 御先触之内ニハ此名無之候得共写取

門原は門谷の間違いだ、大阪から市野とともに帰府しているから、ここにはいない。侍・佐藤伊兵衛の間違いだろう。伊能、高橋、坂部、下河辺は先触れに氏名があり、平山ら内弟子は先触れに名はなかったという。先触れも色々あるから定かではない。村役人は羽織袴で宿舎に挨拶に出る。風呂は身分別に三ヶ所設けられた。お膳は上下とも金森宗和の考案した総輪膳が用意された。

#### 勤方人足覚

一、ぼんてん持六人 一、くさり持四人 一、台持三人

一、竿持老人 一、箱持老人 一、かます持老人

一、たばこ盆持老人 一、刀持六人 一、両掛持老人

一、床机持老人 一、乗物持四人 一、先払式人

(先払い) 是ハ向役人か年寄相勤事



此分三拾壹人 此人足継村迄相勤可申との事  
但シ飾万（シカマ）津より姫路迄入用人足高百人

一、御請印帳差上候時は 岡方総代誰印

海方総代誰印

問屋方総代誰印

右之通差上候事

一、用意三尺位之杭木六本程

一、浜辺ニ而入用五尺位之杭木式三本

一、浜辺掃除別而念入候事

一、こへ壺、雪院（隠）よしず囲ひ之事

一、改村より継村江何百何拾何間

但絵図面之端ニ書入候事

一、毛せん、薄べり式拾枚、筵式拾枚

天測場用である

一、村境江杭木立置事

但シ三尺計、是より何村東西分り

測量作業の直接応援に必要な人足は三一人。よくいわれる膨大な支援要員には多数の間接要員を含んでいる。測量現場の実際の応援要員はこんなものだったろう。人足は通し人足を求められている。泊まり触れが廻ってきたときの、引き受け印は、陸路と海路、宿場の責任者が連印する。杭を用意し、浜辺の掃除を丁寧におこなう。露出した便所、肥糞はよしずで囲うとある。毛氈、薄縁、筵は天測場の設営用である。



現在の塩飽諸島・四国側の丸亀城から望む

飾万津御泊十八日御献立

御座付 三宝熨斗蛇  
本膳 皿 いる酒 わさび  
汁 松露  
くだき柚  
香物  
御飯

うどせん(せん切りカ)  
海そうめん

菓子椀 とり 平皿 巻玉子  
焼物 金頭

三ツ葉 長いも  
ひびき焼

しゐ茸

御夜食

朝漬 汁 かぶら ちよく たゝき午房 御飯

摺ごま 山枅(ママ)ふり

皿 さけ 引而 平皿 薄くず

ミそ漬 鴨

土佐麩

木たけ

一、絵図は大庄屋一組切一紙相調候事

但シ大キ成候ハマニツか三ツ相認、取合宜様ニとの御事

一、御宿大家無御座浦は式軒二而も不苦

但シ下六人御別り

一、向寺何宗寺領何程付居候哉と御尋、役人答何々と申儀銘々ケ様之類調懷中致居候計

提出絵図面は大庄屋の受け持ち区域毎に一枚とする。しかし大きすぎる場合は分けてもよい。大きい宿がないときは分宿してもつよい。質問されたら従来答えていた内容と同じことが答えられるよう、懷中にメモを用意する

赤穂坂越浦大庄屋湯浅四郎左衛門より知せ

一筆致啓上候 然は御公役様最早近辺へ御越被成、一昨十八日室津御泊十九日家島御泊二而御座候 大方家島廿日、廿一日迄御座可被成と相聞申候 廿二日又々室津江御帰被成御泊二而御座候 則同津へ御荷物御残置家島へ御移り被成候 左候へば廿三日相生浦御泊、廿四日当浦御泊廿五日加里屋御泊と相聞申候 併先以御役人書積二而御座候此聞合ハ昨晚当浦より家島へ差遣し候 貞兵衛様ニ引合越罷帰申候 一、室津二而殊外御機嫌悪鋪甚混雜之由、煎茶至而御好キ之所少々悪鋪候而、夫故敷御氣ニ障り候由、尤夜具等之儀も矢張当辺は細二相極メ申候先荒々申上候 委細は御聞合之御使へ及噲置候 是より御聞取可被下候 御好キ御嫌(キライ)之料理物等書取候而懸御目申候 尚相替義も御座候ハバ追々御知らせ可申上候 猶又右之趣片上伯父江も早々御通達可被下候 段々近寄取紛レ乱筆御用捨可被下候 以上

十月廿日

坂越浦大庄屋 湯浅四郎左衛門

日生宗藏様

岡崎門藏様

室津では忠敬の機嫌が悪くて困ったという。お茶がお好きなのに、悪い茶を出したからいけなかったとあるが、にわかには信じ難い。何か他にもあって、たまたま、きっかけとなったのではないか。そのせいというわけではないと思うが、忠敬の食べ物の好き嫌いの情報を知らせている。

御禁物類

魚類 ふ きくらげ ゆば いりこ

よきものは

かぶら 大根 人参 せり 鳥 玉子 長芋 れん根 くわひ  
豆ふくり 菜 椎茸 鰹節ハよし

横から見ていての判断だろう。好物は海から遠い農民の食べ物である。

一、大庄屋初村役人名札入申候事

松平上総介殿領分

備前国和気郡片上村

奉書二而三寸五歩位村境二而差出候事

一、離島之間数相改候事

一、塩浜ハ薄ごふんニ而絵図面へ書入候事

一、播州ニ而は御乗船六拾石位之御船式艘ニ而、純子杯之御幕御打有之、浦々漕船も付居候事

挨拶の際に差し出す手札(名刺)の書き方、寸法を記す。離島も測量をする。

塩田は絵図に薄いごふんを塗って表示する。播磨で忠敬らに提供した乗船は六〇石くらいの船二隻で、漕ぎ舟(引き船)も付属させた。

片上仕構手組

一、御宿御本陣 但亭主上下御迎送り

但シ御門前立砂手桶

一、御迎送り、名主三人羽織、袴二而相勤候事

一、御先払

一、御案内、羽織袴着之者

一、海辺間数取有之節も名主三人付添、大庄屋老丁程跡より付廻り仕候 尤御手分り御廻り被成候儀も有之候ニ付、功(ママ巧)者成者四

五人袴羽織ニ而罷出候事 是は御尋事御座候節、御答申上候手筈也

一、御料理向一汁三菜、御夜食并酒肴等も出し申候 尤熨斗ハ床へ居

置事

一、往来筋両端へ杭木之事

幅四寸 長四尺 是より東片上村分

是より西片上村分

一、御乗船は四拾石位之商船式艘、御国間之御印付御幕打申候

但播州ニ而ハ御乗船出申候付、大庄屋より伺出致有之由

一、御代官様東西御国境御勤事

一、御領分中御付廻りハ御足輕小頭、供老人御連被成候由

一、片上町御奉行様御本陣ニ而御名札御差出、御用等も御座候ハゞ可

被仰付段も被仰上候事

但先達而御勤方之儀御国方へ御伺ヒ御座候所、前段之御格式故例御普請役様御通行之趣ニ而御勤可然由ニ付、此度も御勤被成候事

一、海辺浪打際ニ而間数を打置事、尤陸御運び相成候所は通道二而間数取いたし、右間数を以分見ニ而絵図面仕有之事

片上における扱いである。名主(庄屋)三人が付き添い、大庄屋は後から数

人の気が利いた予備員をつれて従った。手分けをするとか、何か(予想外のこ

とを)聞かれたとき、答えられる用意だという。料理は一汁三菜で夜食のあと

酒肴も出している。酒肴だけということはないから、酒も出したろう。下僕が

買ったか、求められたので少し出したということだろう。原則は禁酒だった。

藩からは、代官が国境まで出張して指図し、領分中の付き添いは、足輕小頭

が供を一人連れてしたがった。格式については藩に伺った結果、前に述べたような情報なので、御普請役の通行の例でよいと指示されていた。つぎに書き上げの例が続く。

### 書上美濃紙豎紙

松平上総介殿御領分備前国和気郡片上村

一、御高四百六拾貳石貳斗貳升

一、町数拾壹町

一、宮内総人家三百六十壹軒

一、人数千三百七拾八人内 男七百拾貳人

女六百六拾六人

一、御定人馬 貳拾五疋 貳拾五人

問屋 七右衛門

五人組頭 太兵衛

往還名主 門兵衛

名主 勘兵衛

大庄屋 大助

真言宗高野山西南院末寺

一、寺院拾軒 内七軒御瀧山真光寺 除地寺領 貳拾六石六斗五升三

合 内壹軒無住

浄土宗大雲寺末寺

壹軒 潮音山大長寺 右同断 三石貳斗

法花(ママ) 宗京都妙覺寺末寺

壹軒 常照山法鏡寺 右同断 三石八斗三合

一向宗京都西本願寺末寺

壹軒 潮光山正覺寺 除地寺領なし

京都吉田殿支配

一、神社四ヶ所 宇佐八幡宮 壹ヶ所 除地社領八石九斗九合

兼尊大明神 壹ヶ所除地社領なし

内 蛭子(エビス)宮壹ヶ所右同断

荒神宮 壹ヶ所右同断

一、社方四軒 内神職壹人 松末清輔 下神人三人、神子貳人

一、東片上村境より伊部(インベ)村迄道法凡九丁三拾壹間、内五丁

三拾壹間宮内人家、四丁野合

一、清水村境迄通道凡拾九丁三拾貳間野合

一、難田村境迄凡拾九丁四拾間野合

一、浦伊部村境迄同凡三丁野合

一、浦長凡貳拾六丁四間

一、往還より海辺迄同凡壹町拾壹間

一、古城跡富田松山 但シ城主浦上近江守國秀

一、遠山梶(クチナシ)島見へ渡凡海上壹里 但シ難田分

一、御朱印地無御座候

右之通町寺丁長、家数、人別、寺院社共書面之通相違無御座候已上

問屋

七右衛門

太兵衛

門兵衛

勘兵衛

同浦伊部村

一、御高

一、御林壹ヶ所 但立木松

一、村内総家数 一、人数 内男女

一、寺院  
右之通

五人組頭 次兵衛  
名主 十八郎

但右順二三ヶ所一紙ニ書載有之候得共、文言同様故略 年号月日  
伊能勘解由様御一名宛仕候由、尤是等ハ前宿之振合見合候と書入候  
事

一、十八日室津御泊十九日同所より絵島へ御渡、廿三日又々室津へ御  
戻り廿四日迄御逗留、廿五日相生、廿六日坂越、廿七日新浜夫より赤  
穂御城下加里屋へ御移、三四日も赤穂御領御掛り、十一月朔日頃備前  
御領福浦へ御移被成候ハバ、岡山辺之福浦より十日余も御懸り可被遊  
哉と、片上之噂ニ御座候

右備前岡山井片上駅迄罷越承り合之所、尾道町筆役文藏儀も同様罷  
越候ニ付申談、片上駅名主門兵衛より供(ママ)々承り合候趣如此御  
座候

十月廿六日 坂越浦ニ而諸仕構頭書写し見聞仕候趣、  
但シ書ニして申上候

一、前々宿へ村々役人總代として役中五六人も参候事

但シ御国方ニ而此役人之儀は、庄屋之類 前々御宿へ罷越し分見測  
量杯被成候御様子見請、其趣ニ取計為心得罷越候義と奉存候 尤  
外ニ御前宿迄は翌日御順行之様子聞合候 旁々御通り筋之庄屋不  
殘御機嫌窺罷出候趣御座候

一、御通り筋道作り之事 海辺土手筋も同断之事

一、御通り筋野坪(肥壺)雪院(隠)こも薙之類ニ而囲ひ有之候事

一、御通り筋御案内ほうき引老人、木鋏持老人先払老人其次へ年寄

但シ此先払之儀は御国ニ而 組頭類股引脚半ニ而、小脇指帶シ  
老人罷越候

一、市町ニ而手桶夜分掛行燈軒別ニ出候事

附り御道筋へ小路より出口ニ而用捨垣致有之事

一、御宿門出口盛り砂行義手桶之事

但シ御宿入口赤穂様御紋付丁ちん式張

一、御宿前箱番所之事

但シ片上駅ニ而承合候処ニ而は、此箱番所御城下ニ限り候趣ニ  
御座候所、坂越浦ニ而御宿脇ニ仕構御座候 勿論御城より同心  
衆式人御詰メ、赤穂様御印付挑灯式張御座候

一、御昼賄ひ之事

但シ此昼賄之義ハ御泊所より小船ニ而持出し、御途中野合ニ  
而も御好披遊候節指出候趣ニ御座候 其節之用意持歩行押ま  
り、毛せん等御膳出し候様子ニ御座候

一、自身番仕堅(固)メ之事

但シ式間口位之家筋幕ヲはり飛口陣笠之類飾り、小役之者相詰  
メ火廻り相勤メ居申候

赤穂領坂越浦の扱いである。先払いの役人は、股引、脚はんで、脇差を帯び  
ていた。案内というよりは、警備の態勢だった。町筋では手桶、掛け提灯とい  
うから、お祭りのような歓迎である。宿には赤穂侯の提灯を二個掲げ、脇に箱  
番所を設けて、お城から同心が出張った。町内では、二間間口くらいの家を借  
りて、幕を張り、蔭口、陣笠を飾って自身番を設け、浦役人が詰めて火の廻り  
を務めた。一段と重い扱いだったようである。

つぎは天測場の用意である。



一、御宿之内十坪計明地用（意ぬけカ）之事

但シ明地之義夜分測量御用御座候由 場所柄之義は北方明キ候  
方角御好ミ被遊候由ニ御座候 坂越浦ニ而御宿之内明地無御座  
候ニ付、老丁程隔り明地御座候而此所仕構御座候 尤五間四方  
之所庭こも之類ニ而高サ老間程ニ用ひ、入口半間ニして此所江  
赤穂様御紋付御丁ちん式張并此所御入用之品左之通ニ御座候

毛せん 式枚

まくり 式十枚 （まくりは方言で薄べりの事）

庭 式十枚

火鉢 三ツ

屏風 半双

机 老ツ

はしこ 老ツ

御茶、多葉草（タバコ）盆

御刀掛 老ツ

かけ矢 老ツ

但シ明之物之義は先方御持参被遊候御様子見請申候

宿の近くに空き地がないので、一丁ばかり離れたところに、五間四方の場所  
を庭・こもなどで囲い、高さ一間くらいにして、天測場を作ったという。入り  
口は半間にして赤穂藩の提灯を出した。浦島測量之図のイメージから、天測場  
は幕で仕切られたと思っていたが、庭、こもで仕切った風除け付きの天測場も  
あったことがわかる。ここにかかげられたのは、天測場に必要の用品である。

御本陣用意

一、御菓子 但シ金平（コンペイ）糖、有平（アルヘイ）糖、松風之類  
差出シ申候

一、御茶 但シ御茶ハ是迄多ク一森（イチモリ）（一森は山城産の茶）  
ヲ指上候趣御座候 御茶わん錦出（手）足高茶台、都而土  
びん茶之外不被召上、至而御茶御好ミ被遊候様子ニ御座候

一、多葉草盆 但シ黒ぬり之類

一、御刀掛三通 但シ三間へ差出候事 御上下共

一、総輪碗 御料理一汁三菜

一、夜具 但シ黒ふち金ニ而御座候

但シ御上四人様御持参、四人様紬、六人様木綿  
不入水（ママ）洗った物ではない新調の意か）火燵

ふとんハ紬之類差出候由ニ御座候  
用意之事

一、風呂三本

一、給仕人六人 但シ拾四五位之若衆袴着相勤申候  
用意之事

一、燭台式ツ

一、御荷物宿 三軒

但シ赤穂様御紋付老張ツゝつり置御座候

記述はますます具体的である。

御荷物

御証文

一、御用御長持 老棹

御用御絵府（絵府は荷札のこと）式枚、御番札老枚、間竿式本、  
合羽老枚、銅たらい式ツ

右御長持ニ添有之

- |          |      |        |    |
|----------|------|--------|----|
| 一、七島箱包   | 七    | 一、柳こり  | 七  |
| 一、七島包かます | 四    | 一、陣笠箱  | 七  |
| 一、皮どうらん  | 七    | 一、小桶   | 七  |
| 一、跡附     | 三ツ   | 一、挑灯箱  | 七  |
| 一、くさり包   | 七ツ   | 一、洪紙包  | 七  |
| 一、からかさ   | 七ツ   | 一、七島長包 | 七  |
| 一、品々     | 七くくり | 一、のぼり  | 七本 |
| 一、扇子形箱   | 七    |        |    |

七島は鹿兒島県とから列島のこと、七島産の藁で作った。あとつけは、客を乗せた馬の尻につける荷物。

- |        |     |       |
|--------|-----|-------|
| 一、駄荷   | 十七箇 | 水縄式ツ添 |
| 一、笠    | 十五  |       |
| 一、柳こり  | 八   |       |
| 一、風呂鋪包 | 式   |       |
| 一、ほうたい | 七   |       |
| 一、のぼり  | 七   |       |
- 右は五拾石位之船三艘ニ而積送ル  
但シ才領三人遣ス
- 右御荷物総人足ニして七拾人手当、勤方人夫左之通ニ御座候
- |         |    |
|---------|----|
| 一、ぼんてん持 | 六人 |
| 一、くさり持  | 四人 |
| 一、拾人    |    |

但シ此人夫拾人赤穂ニ而仕構御座候所、上筋ニ而御式手三手ニ

御分り被遊候ニ付、夫余慶(ママ)入用御座候由 赤穂浦ニ而  
ハ四十人指出候旨見聞仕候

- |        |    |
|--------|----|
| 一、棹持   | 七人 |
| 一、かます持 | 七人 |
| 一、刀持   | 六人 |
- 但此刀持之儀ハ六人宛御分見之節、御同様御量被成候ニ付、外  
用之者へ御持セ可被成入用之儀と見聞仕候
- |         |    |
|---------|----|
| 一、台持    | 三人 |
| 一、箱持    | 七人 |
| 一、床机持   | 七人 |
| 一、たばこ盆持 | 七人 |
| 一、乗物    | 四人 |

- 一、長三尺渡七寸五歩位之角杭五六本、村々ニ而用意致置候事  
但此杭木村境又ハくさり杯御引被成候節、御入用之儀と承り申候  
一、村々村境是より何村東西之分り書印建置候事  
一、床机 二 長老間

伯(ママ)(巾力)七尺一式寸位

外ニ毛氈七枚宛相添

但 床机之儀は御途中替合御休井ニ、御大切成御道具等之置場  
ニ御用い被遊候趣見聞仕候

(この項つづく)



## 談話室だより

### ○伊能測量の歌をつくりませんか！

現職のときは、隠居の道楽だと、逃げ回って出たことがないライオンズクラブの講演会に呼び出されて、定まった儀礼式があり、斉唱する歌があることを知り、伊能忠敬研究会の会合にも皆で唄える歌があったほうがいいなと思いついた。

佐原高校の歌という案もあるが、研究会としてはそうもいくまい。ためしにと歌詞を考えてみた。会員各位の御意見をお伺いしたい。曲は行進曲ふうならどれでも合う歌に思うが、合致したものを使用してもらえばいいだろう。

試案として渡辺・渡部で次のようなものを考えてみた。

#### ■第一次伊能測量の歌

一、蝦夷地に向かつて 二千キロ

歩測、天測、下図書き

朝六つ早く 出立し

暮れまで挑む その姿

二、四十（よんじゅう）キロを 一日で

心ははやる 三厩へ

津軽海峡 風を待ち

時は今よと 船出する

三、宿、到着後 天測の

準備にかかる 入念に

食後の休みの いとまなく

勾陳（こうちん）、房宿（ぼうしゅく） 星を追う

ナレーション「勾陳第二、南中

三八度五〇分

勾陳第二、三八度五〇分 よし

つぎ 房宿第三、五六度四分あたり」

四、地獄に仏の 難所越え

測量進む 蝦夷南岸

エリモ岬の峻険は

門弟間宮の 力かる

五、道なき場所は 船により

ついに達する ニシベツ

これより先は 人がなく

天測のみで 引き返す

#### ■第二次伊能測量の歌

一、蝦夷地の地図の 出来栄えに

ふたたび下る 台命は

本州東岸測量せよ

喜び勇んで 策を立つ

二、間縄揃えて 歩測やめ  
羅針の方位は 二度測り  
遠山目当ても 確実に  
作業手順も 確立す

三、景勝の地 松島や  
峻険迫る 三陸は  
海上遙かに縄を張る  
徹底したる 量地術

四、人跡まれな 下北の  
半島進む 伊能隊  
御用の旗に風吹き  
駕籠は飛ばされ 人は伏す

五、東岸地図の 仕上がり  
幕閣いたく 感動し  
東日本を測らせる  
御用の人馬も 賜りて

ナレーション「刻つき！ お先触れだ  
ご苦労、わかった  
書き役を呼べ、人足を起こせ  
村継ぎだ」

# 伊能測量隊行進曲 (第 次)

(明治34年頃)

栗林宇一 作曲

えぞちにむけてにせんキロ  
ほそくーてんそくしたずかき  
あけむつはやくーしゅたつし  
くれまでいどもそのすがた

左記は別名「鉄道唱歌」で有名です。借用しては？

第三次測量以下はまだ公開に至りません。諸賢兄姉の傑作を歓迎します。  
総会で大合唱が富岡八幡宮境内に響くのを想像しています。楽しみです。歌う人、録音してくれる人も募集しております。  
(渡辺一郎・渡部健三)

○日々の話題から

□「伊能忠敬が下絵」中島描いた大島一円之図の講演会

江戸時代の測量家、伊能忠敬（一七四五―一八一八年）の生き方を学ぶ講演会が十四日、愛媛県温泉郡中島町大浦の町総合文化センターであり、伊能忠敬研究会代表理事の渡辺一郎さんが講演。町民ら約八十人が参加した。

中島町教育委員会主催。渡辺さんは、同町が保存している中島を描いた地図「大島一円之図」について説明。「この図は、一八〇八年（文化五年）に伊能忠敬の測量隊が測量したものが、伊能図とは絵の描き方が違う。下絵を伊能が描き、島民にあげたのではないか」と考察した。

また、事業家として成功した伊能が正確な測量をするための暦学を志すきっかけについて解説。「伊能は、隠居後にもう一つ何か成し遂げようとする強い気持ちがあった。興味があった暦学に取り組み、自宅周辺を歩測する地道な作業から、やがて日本全土を測量するという偉業を実現した」と述べ、「皆さんも一歩踏み出す勇氣を持ち、何かを始めたい」と呼び掛けた。

会場では「大島一円之図」の原図を特別公開。町内に残る伊能測量隊に関する古文書も展示され、興味を誘っていた。

愛媛新聞から  
14年12月19日



伊能忠敬の生きざまについて語る渡辺さん

□ 広告はクリエイティブに「忠敬さん」

NITTO DENKO

## しなやかな挑戦精神。

困難を乗り越えて取り組み、わが国最初の実測日本地図をつくりあげた。幕府や藩の命令ではなく、自らの情熱にしたがって、その偉業を成し遂げたという。伊能図の正確さをささえた技術力、年齢を超えた情熱、地図の重要性への時代感覚・先見力。難題を楽しみながらクリアするしなやかな挑戦精神……「クリエイティブ」だな。

# Global Niche Top

日東電工株式会社  
<http://www.nitto.co.jp>

伊能忠敬 1745-1818  
大島一円之図 複製品

「しなやかな挑戦精神」 50 歳を越えて取り組み、わが国最初の実測日本地図をつくりあげた。幕府や藩の命令ではなく、自らの情熱にしたがって、その偉業を成し遂げたという。伊能図の正確さをささえた技術力、年齢を超えた情熱、地図の重要性への時代感覚・先見力。難題を楽しみながらクリアするしなやかな挑戦精神……「クリエイティブ」だな。

（日経新聞 14.12.20）





# きょうの

米国に保存されていた伊能図  
の復元、展示に取り組む

わた なべ いち ろう  
渡 辺 一 郎さん(73)



「気ぜわしいが一つづつや  
らないと」。伊能忠敬が約二  
百年前に完成した日本地図の  
うち、もっとも詳細な「大図」  
（三万六千分の一）の展覧会  
を二〇〇四年に開催するた  
め、米国で発見した写しの復  
元作業に「伊能忠敬研究会」  
代表理事として取り組んでい  
る。

写しの多くは本来の彩色が  
省略されており、実物の美し  
さの再現は大仕事。つなげる  
と全長約六十ばの大図を並べ  
る会場探しなど展示の準備に  
追われる。

伊能が幕府に提出した完成  
図は火災や関東大震災で、全  
部焼失した。渡辺さんは伊能  
図を求めて日本全国はもちろ

一九九五年に結成した研究  
会のメンバーは約二百三十  
人。「伊能学は天文や暦学、  
数学があるが、僕は技術屋だ  
から苦にならない。会員には  
教師、測量士などがいるし女  
性も多い。いろんな切り口が  
あるんです」と活動に自信を  
見せる。東京生まれ。

もともと日本電電公社（現  
NTT）のコンピュータエ  
ンジニア。二十数年  
前、全国の郵便貯金  
をネットワーク化す  
る仕事で悩んでいた  
とき、五十代から全  
国を歩いて測量した  
伊能に関心を持っ  
た。

## ○ お便りから

□ 堀江敏夫さん・北海道苫小牧市

編集部注・抄録ですがご了承下さい。



函館山にある北海道最初の  
測量地の銅版

今年はニシベツに行つてきます。



室蘭市本輪西町にある伊能橋

## □ 垣見壮一さん・新潟県

一月六日の新潟日報に、伊能忠敬の記事がありました。地方新聞が  
ここまで取り上げたことに感無量です。

小生、年末は佐渡真野湾佐和田町の海岸測量でした。伊能図記載の  
地名も多くなぜかなつかしい気がしました。

拉致事件の現場も近く静かな田舎町に恐ろしい事件があったこと  
に驚いています。（伊能隊宿泊地真野町、旧名新町、享和三年八月三〇

日)。測量終了後海沿いに車を走らすと、冬の小さな漁村は道も狭く人影もなく、二百年前とあまり変わらないのではないかと感じました。仕事を離れたら伊能・平山隊測量行程に従って、佐渡を歩いてみたいと思っています。

(1/7)

# □川上清さん・水戸市

昨五日の茨城新聞にすごろく絵図が掲載されました。これだけの記事が茨城県内に示されても、忠敬さんは常陸の国は一度だけ。そして記録らしいものを残していないとされるのが残念なことです。ただ一行書いた長久保赤水については生誕地高萩市が大事にしており、昨年は展示会が開かれ、四枚の変化を伴う輿地図が並べて掲載されました。赤水はすべて入手情報により地図を編んだものであり、忠敬さんとはまるで違った手法でしたが、一般利用の点では地元も誇りにしております。忠敬さんに可愛がられた間宮林蔵や古河藩の鷹見泉石も茨城の人であり、今の国土地理院ともからめ、地理地図に縁の深い茨城と言えるでしょう。

そんな初夢まじりの思いを持ちました昨日の新聞でした。(1/8)

# □高木崇世さん・北海道札幌市

先日『江戸の伊能忠敬』が到着し、拝見しております。書名がとても良いですね。それに内容も充実しており読みごたえがあります。特に「江戸日記」「宿泊地一覧表」は今後、貴重な資料として活用されることと存じます。

「江戸日記」には、蝦夷地に関わる人物が、たくさんでていますので精読するのが楽しみです。注釈は渡辺さんの記述との事ですが、当時の背景や人物について説明され、とても役に立ちたいです。

間宮、近藤(重蔵)は別としても、高橋三平や山田綱治郎が出てくるのは意外でした。近藤は当時、書物奉行ですが、ずいぶん何度も忠敬と会っていますね。

老婆心ながら以下、気づいた事を書いておきます。……(3/17)

編集部注・以下資料の誤記、引用などの間違いのご指摘をいただきま

した。ありがたく今後の課題とさせていただきます。

# □佐久間達夫さん・佐原市

「伊能忠敬日記」と「伊能忠誨日記」の解読をして、「実測日本地図の祖」といわれている伊能忠敬の影には、多くの協力者がいたことをしみじみと感じています。

伊能家の家業や他家との付き合いや交渉などに献身的に協力した柏木久兵衛、大川治兵衛、漢学の師であり、地図作成に協力した久保木清淵。全国測量実施のために骨を折った桑原隆朝、堀田摂津守正敦など。これらの影の協力者の功績を見逃しがちです。伊能忠敬は幸福者(しあわせもの)だと思います。(3/20)

# □河西浩さん・山梨県石和町

全国すごろくは大変おもしろかったので、学校での教材用に拡大コピーして、裏打ちして利用できるようにしました。(3/24)

# □白根貞夫さん・横須賀市

31号に呉入・船山記念館の記事があり、数年前、私が訪ねた時を偲んでいます。また、佐原高女校歌の作詞作曲者は横須賀中学校歌も同様です。(3/28)

## ○お知らせ

### □『かわらばん』の発行休止

本号より『かわらばん』は本誌に吸収いたしました。特別に号外を必要と判断した場合には発行いたします。そのため本誌の発行頁に増減がありますが、ご了承お願い申し上げます。本号は四頁増です。

『家牒』は筆者都合で休載いたします。

### □『江戸の伊能忠敬―伊能忠敬銅像建立報告書保存版―』発刊に

永らくお待ちせしましたが、ようやく刊行に至りました。事前に申し込みされた方々には三月にお送りしました。この「報告書・保存版」は銅像建立の趣旨に、会報に連載しました「江戸の忠敬日記」を記録として残しました。主に都道府県立図書館、人口の多い市の図書館、会報の寄贈先などに配布されています。全部で二九五館になりました。残念にも二館からは不要ですと返却されました。ある市立図書館では「新着図書」として市民に発行が公開されていました。

なお、全量配布済みで残部はございません。

### □『合本・伊能忠敬研究』発行(会報第二〇号から三〇号を収録)

会報の合本が出来ました。一一冊をまとめた上製本版です。ご希望でしたら一報下さい。送料込み実費で五千円です。

### □伊能忠敬記念館だより・収蔵品展の開催

佐原の「伊能忠敬記念館」では第29回収蔵品展を開催しております。陽気もよくなりました。佐原へお出かけのうえ、是非ご覧下さい。今回の展示史料は重要文化財「伊能忠敬遺書并遺品」の中から伊能

図五点和書籍目録一点が特別に公開されます。

大図は文政元年(一八〇四)版の岐阜、滋賀、福井、石川県方面の六点が紹介され、書籍目録は伊能家が収集した膨大な蔵書を書き上げたものです。

### 伊能図大図(重要文化財・館蔵)

- ・ 自江戸歴尾州赴北国至奥州沿海図第十 自起 至木本
  - ・ 〃 第十一 自木本至蒲生
  - ・ 〃 第十二 自蒲生至橋立
  - ・ 〃 第十三 自橋立至宮越
  - ・ 第十四之一 自宮越至東岩瀬及永見又至分道今浜
- 書籍目録(重要文化財・館蔵)

平成15年3月25日(火)〜5月25日(日)

TEL 0478・54・1118

<http://www.citysawara.chiba.jp/kinenkan/>

これまで二ヶ月ごとに順次公開してきており、29回目です。

### □平成一五年伊能忠敬研究会「例会・総会」の開催

日時 六月十五日(日)

場所 東京深川・富岡八幡宮 結婚式場

次第 出立記念祭 一三時〜

総会 一三時四〇分〜

講演1 一四時〜

講演2 「伊能図から近代図へ」 清水靖夫氏  
「伊能図の色彩について」 浅井京子氏

懇親会 一七時～

会費 七千円（含記念祭費）

（できれば伊能隊に出された食事の再現も）

お願い 出欠連絡、欠席時の委任状を同封ハガキにて、五月一日までにご返送をお願いします。併せて、次項の大阪旅行会の予定もお知らせ下さい。

# □大阪旅行会の御案内

関西地区の伊能忠敬がらみの史蹟などを探訪する見学会を開きます。定員三〇名です。準備の都合上、参加希望の締め切りを五月末日とします。また、会費は八月末までに振込みをお願いします。内容については渡辺までお問い合わせ下さい。御夫婦での参加も歓迎です。

一、期 日 九月一七日（水）～一八日（木） 一泊二日

二、集 合 東京発の方 羽田空港 八・〇〇集合（JAL便）

大阪集合の方 伊丹空港到着口 九・五〇

または、新大阪駅

三、見学箇所 （移動はすべて観光バスを使います）

第一日（一七日）

一・〇〇 間 観測所跡、麻田剛立墓、間重富墓

一・〇〇 天王寺 統国寺脇 阪口楼（普茶料理、有名なお店）

一・三〇 大阪市立科学館 見学 一四・〇〇まで

講話 「伊能忠敬の天文学」 学芸員 嘉数次人氏

あと質疑応答など懇談会、終了 一六・〇〇

宿泊 有馬温泉・兵衛向陽閣 または 角の坊

（男女別 相部屋）

有馬温泉の一流旅館です。チェックイン後、研究発表などのセツトは自由です。企画の持込歓迎。ただし、準備はすべて提案者でお願いします。

第二日（一八日）

九・三〇 大阪歴史博物館（間重富関係の史料など見学）

一・〇〇 昼食 太閤園

一・三〇 緒方洪庵旧宅、司馬遼太郎記念館 見学

一・三〇 伊丹発 大阪集合の方は途中または伊丹解散

## 四、会 費

東京発 四五、〇〇〇円、大阪集合の方は、三一、〇〇〇円の予定です。

## 五、参 考

現在のところ、参加がほぼ決まっている会員は次ぎのとおりです。

伊能夫妻、福田編集担当、前田幹事、渡辺夫妻、伊藤栄子編集委員、

石川九州支部長他一名、安藤顧問、原田大阪支部長、などです。

間さんの御子孫の方に、伊能さんから声をかけていただく予定です。

## 六、その他

催行にあたっては、これまで、忠敬ツアーを四回（第一次の旅、第七次の旅、佐原日帰り、東京都内日帰り）おこなっているパシフィックツアーさんに御協力いただき、内容を考えるとかなり格安に設定しています。多数御参加下さい。担当の金指（かなさし）さんが添乗します。

なお、同社では六月一八、一九日に九十九里、佐原のツアーを企画しています。（銚子犬吠崎泊、あやめ見学。渡辺が講師として同行。東京駅発 参加費二八、〇〇〇円）前回の研究会九十九里ツアーにお出でにならなかった方で、参加希望の方はご連絡ください。パンフを送ります。



## 特報

### アメリカ伊能大図複製への着色作業が始まる

米国議会図書館から送られてきた、伊能大図のデジタル画像が解析され、一般公開用への試作が出来上がりました。紙質、大きさ、基本色調などがきまり、次の工程に入っています。左記写真は伊能アトリエにて、伊能洋さん、浅井京子さん、浅井ふみさんが三陸海岸の釜石唐丹付近の図に彩色しているところです。来年の全国公開の事前準備が本番を迎えています。繊細な作業から、生まれ返る伊能図が楽しみです。

浅井京子さん（東京芸大卒）には六月一五日の総会で「伊能図の色彩について」と題して講演をお願いしております。

（4／9）





## 伊能忠敬研究会御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 年三回以上、 交流誌 随時

### ②例会・見学会の開催

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六―〇七二八六一〇

## 投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁〜六頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamoto/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrim.or.jp/~kokoro>

## 編集後記

〇三月九日の倉敷市は青空でしたが北風が強く、気温は六度までしか上りませんでした。時折小雪が舞いました。第16回瀬戸内倉敷ツーデーマーチで「良寛コース」を20<sup>分</sup>歩いてきました。倉敷の南西部は玉島地区になっています。古くは源平水島の古戦場跡があり、今は水島工業地帯です。なぜ良寛さんは？はゴール近くで判明しました。玉島港を見下ろす小高い丘の上に行基の開基といわれる「円通寺」があり、ここで良寛が22歳から十数年間修行をした寺として有名でした。良寛堂、白雲閣にゆかりの遺墨も残されています。地元郷土史家森脇さんが「玉島円通寺の良寛さん」として本で紹介されていました。その後本号の編集で越後三条が「良寛のみち」として故郷の偉人を誇りにしていることを知りました。「三条は、良寛さまがよく托鉢に来られ……自然と融合し、人の心を温め、人を真に愛した良寛さまの心は、時を越えて今もなお私たちに語りかけてきます」と。動くとお出会う。(F)

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.32 2003



INOH TADANORI'S DIARY	Sakuma Tatsuo	1
Inoh Tadanori Diary (1)		4
TOPICS		
"Dream of the Meridian" has held in Sanjo City	Kakimi Souichi	8
Inoh Map of Gakushuin University Opened on I Net	Saitou Hitoshi	12
New Year Visit to Inoh Tadataka Statue	Machino Sadao	16
"INOH TADATAKA"s Historic Spots" Opened on I Net	Maeda Koko	22
FROM VISITORS' RESISTERS		
Please Decipher the Signs	Inoh Yoko	18
	Editorial Department	20
REGEONEL MATERIALS		
Family Documents 23 : Kageyasu' Diary	Ando Yukiko	25
Draft of Inoh Maps In Tokyo University	Watanabe Ichiro	30
Disparity of Meridians on Inih Maps (1)	Yoshida Masahito	34
REGEONAL MATERIALS		
Arrangements of the chief Inn for Inoh in Sasayama	Yokogawa Junichiro	44
Documents of Inoh Survey In Iwaki Island (2)	Ito Eiko	51
MEETING ROOM		
Inoh Survey Song	Editorial Department	60
Dairy Topics of The Office		62
Recent Reports from Members		
New Exhibition Informations from "Inoh Tadataka Memorial Museum"		64
2003 study meeting and General meeting and Osaka Travel		66
SPECIAL NEWS		
America Inoh Maps Painting Started	Editorial Department	68

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY